石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事 業 報 告 書

第 13 巻

平成 27 年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻　頭　言

地域ケア総合センターは学外の人々･人材・施設と大学との出会いを取り持ち、大学にある資源を地域に還元する場です。看護が健康な人から終末期の人まで幅広く対象としていることと同様、看護大学に附属したこのセンターも人の生活や暮らしにまつわる多様な事象に幅広く関心を抱き、さらに拡げることを目指して活動をしています。

一方で、平成26年に聞こえ始めた “地方創生”は、依然として注目され、政策の中心になっています。平成26年11月に成立した、まち・ひと・しごと創生法のもとに、少子高齢化の進展への的確な対応、夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができる地域社会の形成、地域社会を担う個性豊かで多様な人材の確保等が求められています。本学のような小さな県立の大学にも“地方創生”への貢献が求められ、平成27年に文部科学省が採択したCOC+事業「金沢・加賀・能登で地域思考型教育による夢と志を持つ人材養成」の一員として他の大学と肩を並べて歩み始めました。

これらを通じ、あらためて本地域ケア総合センターのこれまでの活動や実績が “地方創生”の考え方を先見的に持っていたかを思わずにはいられません。さらに本学では“地方創生”よりもっとミクロな“地域創生”に目を向け、大学の地元やそれよりも不便な地域で、まちを知り、まちと協働で活動を作り、ひとを育てることを行ってきました。人は、好きなふるさとで暮らせることが何よりの安心とつながると考えてのことです。学生もそこで学ぶことによって地域（そこがどんな辺鄙な場所であろうとも）で暮らすことの意義を知り、いつかそれを支える看護職になってくれるものと期待も込めています。

具体的には、本学ではかほく市を始めとして、特定の市町あるいはその中の小さな地区とタイアップした教員の活動が活発化しています。当然学生もその活動に参加して学びかつ貢献しています。本センターは、そのような活動を支援し、さらに新たな活動を誕生させたいと考えています。能登にある大学、奥能登に最も近い大学としてしばらくこの方向性を維持してゆきたいと考えております。

さらに本センターは近年、国際交流にも継続的に力を入れ、JICA 北陸に協力すると同時に、教職員･学生のグローバルな視野の広がりに役立てています。

この報告書で平成 27 年度にどのような活動があったかをご覧いただき、忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚に存じます。

石川県公立大学法人　石川県立看護大学
学長　石垣和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第 13 巻）」発刊に寄せて

石川県立看護大学では、地域ケア総合センターの年次活動報告書（事業報告書）を刊行してまいりました。本年も、運営委員会ならびに地域ケア総合センターの活動にご協力いただいた教職員と地域のみなさまの多彩な活動をまとめ、ここに第 13 巻を発刊する運びとなりました。

平成 27 年度は、昨年度に引き続き「人材育成」、「地域連携・貢献」、「国際貢献」の３本柱で地域に密着した活動を推進してまいりました。

専門職研修の今年度の新たな取り組みとして、がんプロとの共同開催で、老人、がん、精神など、複数の専門看護師による公開事例検討会「複数の専門看護師による公開事例検討会」を行わせていただきました。

地域貢献事業では、かほく市子育て支援課との共同開催で「子育てしやすい街づくり　つながり合い・響きあうまちづくり」として、公開フォーラムを行わせていただきました。

国際貢献事業のうち、パラグアイ日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」では、2 名の研修員を迎えました。学内で高齢者福祉制度や日本の伝統文化、ケアシステム、介護に関する知識や技術を学ぶだけでなく、羽咋市社会福祉協議会にご協力いただき、病院や施設における実践的な実習も行わせていただきました。青年研修「中央アジア・コーカサス混成青年研修／地域保健医療実施管理コース」では、12 名の研修員を迎えました。学内で疫学と保健医療行政、人口動態と健康課題、公衆衛生看護の体制としくみ、保健医療行政のしくみ、医薬分業制度と薬剤師の役割について学び、医療機関、処方箋対応薬局、県庁、県型保健所、市保健センター、検診センター、保健環境衛生サーベイランス関連施設での研修も行わせていただきました。

以上の事業は、本年度行った事業の一部です。各事業の詳細は、本冊子に記載されておりますので、地域のみなさまにおかれましては、是非とも本冊子をご高覧いただき、本学地域ケア総合センターへのご理解を深めていただき、引き続きご指導、ご助言を賜れば幸甚に存じます 。

地域ケア総合センター長　長谷川　昇

目　　次

(ページ)

1　人材育成事業

1-1　専門職研修

1-1-1　複数の専門看護師による公開事例検討会 …… 1

1-1-2　ケアのデザイン　手のケアを見直す …… 2

1-1-3　訪問看護の現場に活かすフィジカルアセスメント …… 3

1-1-4　看護実践に活かすやさしい検査のみかた・考え方 …… 4

1-1-5　看護実践に活かすフィジカルアセスメント …… 5

1-2　本学教員主催の研究会・事例検討会

1-2-1　ジェネラリストのための事例検討 …… 6

1-2-2　ペリネイタル･グリーフケア検討会 …… 8

1-2-3　子育て支援・虐待予防に関する勉強会 …… １０

1-2-4　高齢者ケア研究事例検討会 …… １１

1-2-5　がん看護事例検討会（北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン） …… １２

1-3　相談サービス事業

1-3-1　各種研修会等への講師派遣事業 …… １３

1-3-2　病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲） …… １５

2　地域連携・貢献事業

2-1　地域連携事業

2-1-1　来人喜人（きときと）健康創りプロジェクト事業 …… １７

2-1-2　健康応援倶楽部・健康増進モデル事業 …… １８

2-1-3　棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり …… ２０

2-1-4　いきいき美人大学校 …… ２１

2-2　生涯学習講座

2-2-1　石川県立看護大学公開フォーラム …… ２２

2-2-2　公開研究会「死生観とケア」 …… ２３

2-2-3　あかちゃんをお空にみおくった方の自助グループに対するサポート活動 … ２４

2-2-4　祖父母の楽しい上手な孫育て教室 …… ２６

2-2-5　子育て　どろっぷ・イン・さろん …… ２７

2-2-6　おやこのたのしいじかん …… ２９

2-3　ワンストップサービス事業 …… ３０

3　国際貢献事業

3-1　JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」 …… ３１

3-2　JICA 中央アジア・コーカサス混成青年研修「地域保健医療実施管理」 …… ３６

4　その他

4-1　かほく市との包括的連携協定に基づく事業 …… ４１

4-2　平成 25 年度石川県委託事業・協力事業(喀痰吸引等研修事業) …… ４４

4-3　被災地ボランティア活動（宮城県） …… ４６

1　人材育成事業

１－１－１　複雑な問題をみんなで考えてみませんか？

多領域の専門看護師による公開事例検討会

1. 事例検討会の趣旨

がん疾患と認知症を有する高齢者における看護の検討会を開催し、がん看護 CNS、老年看護 CNS、精神看護 CNS の 3 分野の CNS がそれぞれの視点での事例の看護を考え、意見交換を通して参加した看護師がディスカッションをすることで、看護の考え方を学ぶ機会とする。

2. 実施状況

日　　時：平成27年９月23日（水・祝）10：00～12：00
場　　所：石川県立看護大学（大講義室）
座　　長：牧野智恵（石川県立看護大学　成人看護学　教授）
　　高山成子（石川県立看護大学　老年看護学　教授）
総合司会：彦　聖美（石川県立看護大学　在宅看護学　准教授）
コーディネーター・事例提供：進藤喜予医師
　（東大阪市立総合病院　緩和ケア内科主席部長）
パネリスト：老人看護専門看護師　直井千津子（金沢医科大学病院）
　古谷和紀（京都大学医学部付属病院）
　がん看護専門看護師　内村恵里子（石川県立中央病院）
　山瀬勝巳（KKR北陸病院）
　精神看護専門看護師　中井有里（金沢医科大学病院）

参 加 者：44名

北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プランとの合同企画で、「多領域の専門看護師による公開事例検討会」を開催した。多領域の専門看護師と共に公開事例検討会を開催する企画は初めての試みであった。今回の事例では、軽度認知症のある高齢者ががんを患いCTR（化学療法・放射線療法）の後、せん妄症状が出現し、今後の療養場所を決めていく際に、今の状態をどうアセスメントし支援していく必要があるかという論点で行われた。事例紹介の後、7 グループに分かれてディスカッションし、その内容をいくつかのグループから発表してもらい共有した。「まず本人の意思を確認する」、「身体的なアセスメントを行い、症状のコントロールやどのような療養場所が現実的か確認をする」、「キーパーソン（長男）を交えて療養場所のすり合わせをする」、「在宅に備えてもう少し入院の継続をする」、「栄養状態やせん妄状態など、病院でアセスメントし緩和ケアチームの介入など方向性を考える」、「家族の病識が不足しており、家族の理解を確認していく必要がある」、「本人の認知機能低下もあり、意思決定支援が必要である」、「低栄養や認知機能低下もあり、NSTやMSWなど多職種協働での介入が必要である」などの活発な意見がだされた。

続いて、５名の専門看護師（がん、老人、精神）から、入院継続、在宅、施設での療養を進めるという仮設定のもと、今の状態をどうアセスメントし、今後どのような支援が必要かについて、各専門領域の視点から発表した。「食欲不振のため入院が必要～緩和ケアチーム（PTC）が取り組む問題点とその対応」、「安全で希望に沿った食事を継続するために嚥下評価を共有する」、「身体と心（精神）のつながり」、「高齢者へのがん化学療法と在宅療養支援」、「多様な施設療養選択の提案」等、広範囲な専門的な知識を踏まえて、支援の方向性への多くの示唆を得た。

3. 事例検討会の成果

今回の事例のように、がん治療、緩和ケア、在宅療養は、患者個人とご家族を巻き込みながら、延長線上で行きつ戻りつを繰り返し、営まれる。それを支援する看護師も自身の専門領域だけに捉われることなく、各専門看護師と協働し、より良いケアにつなげることが望まれる。

がん看護の質の向上を図るため、がん看護専門看護師と共に、日々のがん患者様やそのご家族への看護実践の中で遭遇する困難事例について、施設の垣根を越えて意見交換を行うことを通して、北陸 3 県のがん看護の質の向上を図るケアの専門家としての実践力を育英・向上する場とする。

１－１－２　ケアのデザイン　手のケアを見直す

1. 事業の目的：

看護における手を用いたケアの価値を見直すとともに長期臥床患者の拘縮した手指の清潔ケアの方法を、手浴ベースンの開発・製品化の実践例等を通して学ぶ。また、患者・看護職のニーズと企業のシーズから看護用具の開発の発信について考える。

2. 実施状況：

開催日時		テーマ・講師	参加人数・所属施設
第1回	H27.8.8(土) 13:30-16:30	第１部 ケアをデザインするとは 川島　和代　石川県立看護大学 大学院看護デザイン分野 第２部 長期臥床患者の拘縮手の清潔ケア 中田　弘子　石川県立看護大学 大学院看護デザイン分野	55名参加、 アンケート回収47名 所属：医療機関36名、介護施設5名 教育機関4名、その他1名、 無回答1名
第2回	H27.9.21(日) 13:30-16:00	看護・介護用具のデザイン 小林　宏光　石川県立看護大学 大学院看護デザイン分野	22名参加、 アンケート回収19名 所属：医療施設13名、介護施設3名、 教育機関2名、無回答1名

3. 実施内容：

第 1 回の第１部では、冒頭に「ケアをデザインするとは」をテーマに川島が講義を担当した。ケアをデザインするとは、人間の生活というごくありふれた営みの中において「人と物と環境との関係に目を向けその問題や矛盾を見いだし新たな価値ある関係をソフト・ハード両面から総合的に創出する」(荒井利春）ことと定義づけた。具体的な医療における環境を取り上げケアの視点で問題や矛盾を見出すことから始めようと述べた。第２部では、中田が長期療養患者の拘縮手の清潔ケアに関する研究成果を用いて、健康な時には意識にのぼらない手の衛生性が消耗の原因となることを述べ、問題提起を行った。その上で、臥床患者の拘縮手の清潔を維持するために開発した石川県立看護大学発「手浴用ベースン」の開発過程について講義を行った。講義後、実際に手浴体験を通して手浴の効果を実感してもらい、看護における手のケアを見直そうと呼びかけた。

第２回は「看護・介護用具のデザイン」というテーマで小林が講義を行った。昨年に続き、改善（KAIZEN）の意義とプロセス、問題の発見と解決のコツについてこれまでの看護用具・機器などの開発例を紹介しながら講義を行った。特にフール・プルーフの考えと製品（誤作動したくてもできない製品）は医療安全上も有用なものであり、ケア用具の開発過程に普及されると良いと考える。

さらに、人間工学等の専門家との協働で新たな視点が広がることを実感してもらえた。

4. 評価と今後の課題：

両研修会後のアンケート調査によると、4段階評定のうち全参加者が「満足」・「やや満足」の回答であった。また、実践での活用についても参加者全員が活用できると回答していた。今回も現場からの新しい用具開発の相談や提案はなかったが、大学院看護デザイン分野関連の研修として位置づけ、継続的に実施し、看護・介護の現場発信のケア用具の開発のつなげていきたいと考える。

１－１－３「訪問看護の現場に活かすフィジカルアセスメント」

-訪問看護分野の特定看護師の看護実践-

1. 事業の目的：

法改正で創設された「特定行為に係る看護師の研修制度」に向けた取り組みが全国的に進んでいる。本研修では、平成 24 年から訪問看護分野の特定看護師として看護実践をおこない、訪問看護管理者でもある講師をお招きし、訪問看護現場で活用できるフィジカルアセスメントについて講義・演習を行う。また、「特定行為に係る看護実践」に関する知識や情報提供をあわせて行う。

2. 実施状況：

平成 27 年 9 月 19 日(土)10:30－16:30、

石川県立看護大学　基礎看護学実習室

テーマ：「訪問看護の現場に活かすフィジカルアセスメント

―訪問看護分野の特定看護師の看護実践―」

講師：

１）講師：石川倫子先生（本学看護キャリアセンター准教授）

２）講師：光根　美保先生

（JA 大分厚生連、訪問看護ステーションつるみ　係長、特定看護師）

参加者：訪問看護師 34 名

3. 実施内容：

「特定行為に係る看護実践」（知識･情報提供）[1)]

「訪問看護で活かせるフィジカルアセスメント」（講義）[2)]

「訪問看護で活かせるフィジカルアセスメント」（演習）

4　評価と今後の課題：

アンケートの結果は、参加者の訪問看護歴は 1 年未満 8 名、1-5 年 9 名、6-10 年 4 名、11-15 年 5 名、16 年以上 3 名、不明 4 名と、1-5 年が最も多かった。講座満足度は、とても満足 22 人（65%）、満足 8 名（23%）、おおよそ満足 3 名(9%)であった。意見や感想では、『特定行為に係る看護実践』は、「考え方、制度を学ぶことができた」「ＮＰのことを初めて知った」等があった。『フィジカルアセスメントの講義･演習』では「訪問看護現場で役立つ講義･演習だった」「実践レベルでわかりやすかった」「症状別に教えてもらい、わかりやすかった」等があった。今後の訪問活動に対し、「日頃、疑問に思っていることが理解できた」「肺音聴診の方法、カルテ記載表現、優先して視るべきことがわかった」「診療方法が以前に比べ充実しそう」等があがった。フィジカルアセスメントは、訪問看護の基本技術である。本研修の講義・演習では、フィジカルアセスメントから、症状別の臨床推論へとつなげる実際をおこない、それが訪問看護の現場の実践に有益なものとなった。今後は県内の訪問看護師らが、本学実習室を有効活用しながら看護技術の向上を図れるような本研修の継続が求められている。

１－１－４　看護実践に活かすやさしい検査のみかた･考え方

1. 事業の目的

第一線で活躍する看護師にとって、自覚症状・身体所見に加えて患者の検査データをアセスメント出来ることはより良いケアを提供する上で大きな助けとなる。そこで、今回初めて地域ケアの人材育成事業として、県内看護職者を対象としたセミナーを開催した。前半に検査データのみかた・考え方についての基本的知識の講義を行い、後半は知識を活用した臨床推論（事例検討）をグループワーク形式で実施した。

2. 実施状況

日　時：平成２７年８月１日（土）　　１３：００～１６：００
講　師：多久和　典子
場　所：石川県立看護大学　基礎看護学実習室
参加者：21 名

3. 実施内容

（１）講義

血液検査（血算・血液像、血液生化学)、尿検査等についての基本知識を講義した。

（２）事例検討（臨床推論）

さまざまな事例について、自覚症状、バイタルサイン、身体所見に加えて検査所見を総合したアセスメントの演習を行った。

4. 評価と今後の課題

病院、在宅看護ステーション、老人保健施設、看護専門学校、医療福祉センター等、多彩な職場に勤務する看護師の方々に参加いただいき、主催者が同一の「看護実践に活かすフィジカルアセスメント」と両方に参加された方も複数名おられた。臨床推論は大変好評であり、普段はこのような観点から考えないので大変参考になった､毎年開催してほしいという希望を多くいただいた。講義の前半部分は時間（１コマ９０分）に対して情報量が多く、今後は何回かに分けて実施することが望ましいと考えられる。

１－１－５　看護実践に活かすフィジカルアセスメント

1. 事業の目的

研ぎ澄まされた五感と専門知識・経験を最大限に動員して患者の身体所見を得るフィジカルアセスメントは医療者にとって極めて重要な専門技能であり、看護基礎教育過程においても2009 年度から必修科目として位置づけられている。しかしながら、すでに医療現場で活躍している看護師にとって、全身の系統的なフィジカルアセスメントをあらためて確認し、ブラッシュアップする学びの場は限られている。今回、地域ケアの人材育成事業として初めて、全身のフィジカルアセスメントの演習を本学教員２名（医師・看護師）が連携して開催した。充実した演習を可能とするために参加者の人数は少数に設定した。

2. 実施状況

日　時：平成２７年7月４日（土）　　１０：３０～１６：３０
講　師：石川　倫子・多久和　典子
場　所：石川県立看護大学　基礎看護学実習室
参加者：7名

3. 実施内容

頭頸部・胸部・腹部・簡単な神経学的診察からなる全身のアセスメントについて、講師２名が分担して講義と演習指導を行った。なお患者役として本学男子学生の協力を得た。

4. 評価と今後の課題

病院、在宅看護ステーション、老人保健施設、看護専門学校等、多彩な職場に勤務する看護師の方々に参加いただいた。日頃の看護場面での疑問についての質疑応答や、確認できたこと・新たに得られた知識を職場に持ちかえって共有・活用できる、との感想をいただいた。理想をいえば、多くの模擬患者ボランティアの参加を得て演習を行うこと、フィジカルアセスメントと臨床推論を連動させたプログラムをシリーズで展開することが望ましい。

１－２　本学教員主催の研究会・事例検討会

１－２－１　看護実践力向上セミナー　ジェネラリストのための事例検討

担当者：中田 弘子・川島 和代

１　実施目的：

本研修会の目的は、日々の看護実践の中で自分のかかわりが良かったのか、もっとできることがあるのではないかと疑問を抱いている看護職を対象に、「看護とは」に照らしながら事例検討を行い、ジェネラリストとして確かなアセスメント能力を培い、実践力向上をめざすことである。

２　事例検討の目標：

事例検討の目標は、事例提供者である看護師が自己の看護実践をふり返り、看護が実施できたのか自己評価できること、また、参加者は患者や家族の立場、事例提供者の立場にも立ちながら事例の理解を深め、自分の看護実践に活用できる指針を得ることである。

（患者や家族の立場、事例提供者の立場に立って考えることができれば、ジェネラリストに重要な立場変換能力を育むことにつながる。）

３　実施内容：

１）対象者：県内の医療施設等に勤務している臨床看護師、看護教員、看護学生

２）開催日ならびに内容：

1 回目　平成 27 年 7 月 26 日（日）13:30～16:00　地域ケア総合センター研修室
テーマ　自己の看護実践、教育実践を振り返る①
チューター　中田弘子、川島和代、藤田三恵　他　3 名　　計 6 名
参加者：30 名（医療機関 27 名、看護学生 1 名、その他 2 名）

2 回目　平成 27 年 11 月 28 日（土）13:30～16:00　地域ケア総合センター研修室
テーマ　自己の看護実践、教育実践を振り返る②
チューター　川島和代、中田弘子　他　4 名　計 6 名
参加者：42 名（医療機関 36 名、教育機関 2 名、看護学生 1 名、その他 3 名）

３）事例検討会の進め方：

本事例検討会では、参加者から提供された事例を用いて事例検討を行っている。事例検討は、グループ討議を中心とし、進行は各グループを担当するチューターが担った。チューターは事前に資料を読みグループワークが発展するよう意見の引き出し役を担う。

本学教員が全体進行役として事例検討会をまとめ、「看護とは」に照らしながら対象の特徴と看護の方向性を示すことで看護実践をふり返り、自己評価できる手助けを行っている。

事例検討の素材となる事例は、事例提供者ならびに施設の許可のもと使用した。当該事例の個人情報は個人が特定されないよう必要最小限の事実を精選した。また、終了後は事例の情報が記載された資料はナンバリングし回収、シュレッダーした。

４）．事例検討会の実際：

平成 27 年度は、2 回の事例検討会に 3 事例が事例検討の場に提出された。事例の概要と提供の理由について下記のように示す。事例提供者は石川県内の医療機関に勤務する中堅看護師からの事例提供であった。1 回目は参加者全体で 1 事例を検討し、2 回目は 2 事例のうち、参加者が関心のある方を選択頂きグループ編成を行った。

回	事例の概要と事例提供の理由
1回目	事例１：60 歳代前半女性、BMI16、極度の円背。難治性出血性胃潰瘍、2 型糖尿病で外来通院中。初診時より治療や入院に対して拒否が強い（吐血など体調が悪い時でも点滴のみを希望し、Hb 低値で輸血を勧められても頑なに拒否する。）主食は粥、義歯なし。夫と 2 人暮らし、長男夫婦・孫は近所に住み、この人が孫の面倒をみている。家事全般を担う。ペットを飼っている。予約外や時間外の受診が増えてきており、このままでは体力の衰えが著しい。どのように患者をアセスメントし、介入していけば良いのか検討したい。
2回目	事例２：80 代半ば男性、消化器がん、腹膜播種、腹水貯留。妻と 2 人暮らし、近所に長女家族がいる。1 年前に手術するも根治術は適応されず、抗がん剤治療受ける。体調が急変し緊急入院。治療薬は中断。担当する医師間でも意見が異なる。退院困難と思われていた患者が自宅退院可能となった。自宅退院まで可能となったプロセスを振り返り今後の看護実践に活かしたい。 事例３：70 歳代後半男性、BMI16.7。肺気腫等、呼吸状態の悪化から入退院を繰り返し、徐々に ADL は低下。今回は ADL 全介助で再入院、高流量の酸素療法（ネーザルハイフロー）のため、看護師が訪室し日常生活動作の援助を実施。入院して 1 カ月を過ぎた頃から全身状態の改善とともに、看護師の対応についての不満を訴え、声を荒げるようになった。看護が後手になっていると思い、対象を再アセスメントし対応を考えたい。

５）参加者の反応（事例検討会後のアンケート結果より）：

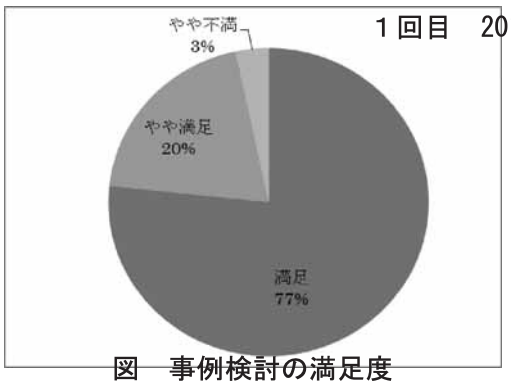


図　事例検討の満足度

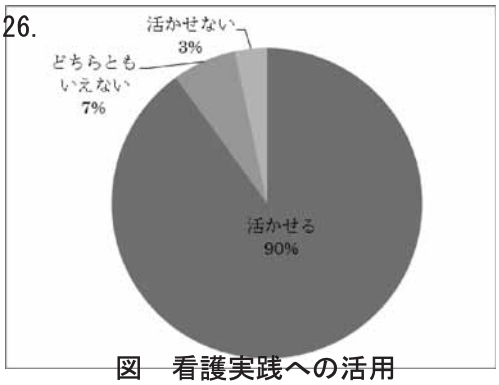


図　看護実践への活用

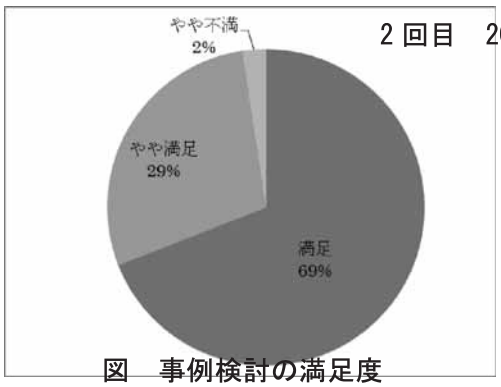


図　事例検討の満足度

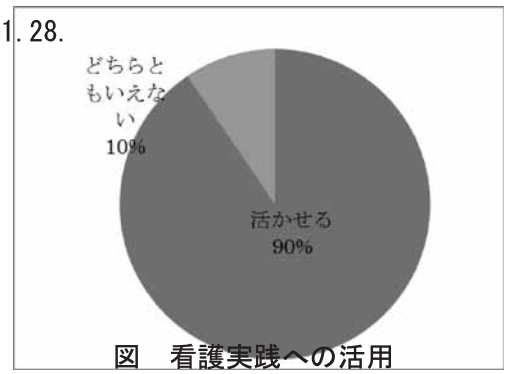


図　看護実践への活用

４　今後の課題：

事例検討は、自己の実践をふり返ることがアセスメント力を高め、継続的な学習を重ねていくことに意義がある。本事例検討会参加者の半数近くが経験年数１～3 年までの看護職で占められており、継続参加できるよう、魅力的な学習の場を提供することが課題である。

１－２－２　ペリネイタル・グリーフケア検討会　～周産期の死のケアの充実をはかるために～

事業の目的：県内の周産期の死に関わっている看護職がケアの現状を話し合い、互いに情報交換したり、体験者の思いを聞いたり、教員等からの新しい情報を得ることによって、臨床での周産期のケアの充実をはかる。

目　　標：第 13 回:「やってみよう!! 赤ちゃんのエンゼルメイク」:グリーフケアの実践方法を学ぶことができる。

第 14 回 :「体験者の声を聴こう!!」:体験者の思いを知ることで、今後のグリーフケアに活かすことができる。

実 施 状 況：

開催日時・場所：第 13 回 : H27. 7. 14（火）13:30～16:00 石川県立看護大学　母性・小児看護学実習室

第 14 回 : H28. 2. 9（火）13:30～16:00　石川県女性センター

講　　師：米田昌代、吉田和枝、曽山小織

協力:桶作梢、工藤淳子（石川県立中央病院)、河村淳子（まなぶクリニック）

森田智恵(金沢大学附属病院)、北濱まさみ（富山福祉短期大学)

参 加 者：第 13 回 : 26 名（産科・NICU に勤務する助産師・看護師 25 名　院生等 1 名　内企画委員 4 名）

第 14 回 : 29 名（産科・NICU に勤務する助産師・看護師 28 名　院生等 1 名　内企画委員 5 名）

実 施 内 容：

第 13 回:「やってみよう!! 赤ちゃんのエンゼルメイク」

始めに米田より、6 月に開催された 18 トリソミーの子ども達写真展の報告を行った。その後、本日のメインテーマである本会の企画委員で富山福祉短期大学の北濱氏の「赤ちゃんへのエンゼルメイク」について、取り組み施設の経過とアフターフォローについての話を聞いた後、体験セッションを実施した。体験セッションでは最初の 15 分間デモンストレーションを見学し、その後、4 つのグループに分かれて赤ちゃん人形を使用して、実際のメイクを体験した。体験後、グループ毎に振り返りと各施設の情報交換の時間をもった。

第 14 回 :「体験者の声を聴こう!!」

始めに企画委員の工藤氏より 12 月に「きょうだいのグリーフケア」をテーマに開催された東アジアグリーフケアセミナーの報告を行った。その後、本日のテーマである体験者の話のビデオ上映を実施した。体験者の話は 7 月に母性看護方法論の特別講義で話してくださった 3 名の方のものである。 1 人目は 13 トリソミーのお子さんを亡くされた福井の自助グループハートシェアの会代表の藤田美保氏、2 人目は 18 トリソミー写真展を運営した Team18 石川の上濃雅子氏、3 人目は常位胎盤早期剥離でお子さんを亡くされ、現在自助グループ小さな天使のママの会に所属している山根和美氏である。ビデオ上映後、5 グループに分かれて、各グループ毎に自己紹介、体験談を聞いての思い、近況を話し、現在抱えている事例等で困りごとがあれば出し合い、意見をもらったり、各施設からの情報提供からヒントを得る時間を設けた。

評価と今後の課題：

第 13 回:「やってみよう!! 赤ちゃんのエンゼルメイク」

昨年度第 11 回に北濱氏が日総研セミナー「赤ちゃんへのエンゼルメイク」での参加者のアンケート結果を報告したところから、エンゼルメイクに関する希望があり、実現することとなった。エンゼルメイクは第 4 回のときにも企画し、好評であった。今回 2 回目の開催であったが、日総研セミナーと比較すると無料で県内開催ということもあり、参加希望者が多く、アンケート結果からも満足度は高かった。会場についてはこれまで県立中央病院での開催であったため、看護大学は遠いという印象があったのか、やや不満足という意見もみられた。やはり、参加者の参加しやすさを考えると金沢での開催の方がよいと考えられ、今後、県立中央病院工事期間中の平日の会場確保については要検討である。

第 14 回 :「体験者の声を聴こう!!」

当初の予定は前年度の課題をふまえ、「進んでいる施設のケア・連携を学ぼう!」ということで、福井県立病院の方に来ていただく予定であったが、講師の都合で急遽来られなくなり、特別講義の体験談のビデオを視聴するという企画に変更した。参加者が確保できるか心配されたが、県外からの参加もあり、満足度も高かった。特別講義のときも臨床の方にご案内したが、来られない方が多く、この機会に聴くことができてよかったという意見をいただいた。普段聴くことのできない体験者の声は大変貴重なものとなっていた。また、視聴後のグループワークが情報交換、悩みの共有、辛い体験を聴いてもらえる場になっており、大変有意義なものとなっていた。

全体:

どちらの企画も協力者である企画委員は、企画に対する意見提示、グループワークの進行、まとめの記録等積極的に関わってくださっている。今後も企画委員を中心として臨床のニーズに即した内容で企画していきたいと考える。参加人数は今年は年度始めにちらし配布を実施したこともあり、増加した。来年も年度始めに関係機関にちらしを配布することとする。

１－２－３　子育て支援・虐待予防に関する勉強会（事例検討会）

事例検討会の目的

地域や医療現場での子育て支援や虐待予防に関するケア経験を共有し、よりよい関わりに向けて研鑽する。

実施状況

参加者：子育て支援・虐待予防に興味がある看護師、助産師、本学大学院修了生、大学院生、母性・小児看護学教員、保健師

開催場所：石川県立看護大学　教育研究棟 3 階会議室

開催概要

回数	開催期日 時間	テーマ	事例提供者	参加 人数
1	平成 27 年 7 月 8 日(水) 19:00～20:30	若年性妊娠の母親 －児の在宅医療ケアと退院へ向けた家族支援に困難を要した事例－	小児看護 専門看護師	18 人
2	9 月 9 日(水) 19:00～20:30	日齢 21 日目吐血を主訴に入院をした乳児 - 育児困難の家族から地域連携を要した事例-	小児救急看護 認定看護師	12 人
3	9 月 30 日(水) 19:00～20:30	社会的スキルが未熟な両親をもつ 腎不全の児と家族への継続看護	小児看護 専門看護師	10 人
4	11 月 11 日(水) 19:00～20:30	事例にみる連携・調整の実際 －摂食障害の 21 歳初産婦－	保健師	12 人
5	12 月 2 日(水) 19:00～20:30	解離症状、気分の変調を呈する児童とのかかわりから見えてきたもの	小児看護 専門看護師	9 人

事例検討会の成果・評価と今後の課題

今年度の事例検討会は､事例提供者として小児看護専門看護師､小児救急認定看護師に依頼し、さらに地域保健師にも加わっていただいた。多職種による事例検討ができ、参加者全体が様々な視点で意見交換し、子どもと家族へのかかわり方を考える充実した時間が持てた。

参加者の感想からも、多職種での検討により、日ごろのかかわりを振り返ることができるという意見や、今後の支援に関する新たな視点を得られたという意見が聞かれた。

これまでの成果等をふまえ、次年度は事例検討会に加えて、子どもと家族を支援している他の専門職の講義も導入し、子育て支援・虐待予防にかかわる支援者のスキルアップを目指していく予定である。

１－２－４　高齢者ケア研究事例検討会

1. 事例検討会の趣旨

県内の高齢者ケアの質の向上を高めるために、ケアの専門家としての実践能力を育成・向上する継続的な学習の場とする。また、実践と教育・研究の連携の場としての有用性をはかる。

2. 資料の取り扱いについて

＊ 個人のプライバシーを侵害しない
＊ 個人の責任において資料を安全に保管する。不要になった時は、シュレッダー処理する。
＊ 資料を他に活用する場合は、事例提供者の了解を得る。
＊ 資料に関しては、個人が倫理的な責任を負う。

3. 実施状況

回	月　日	テーマ	参加人数
第 102 回	平成 27 年 5 月 13 日(水)	「急性期を脱した慢性心不全入院患者の退院への思いと実際の ADL とのずれに対する関わり」	15 名
第 103 回	6 月 10 日(水)	「認知症で食事量低下をきたした患者への援助」	15 名
第 104 回	7 月 8 日（水）	「認知症を有する中等度～重度の慢性心不全高齢者に対する、心負荷軽減を目的とした介入の効果とタイミングを振り返る」	13 名
第 105 回	10 月 7 日（水）	「独居の認知症高齢者に対する退院支援」	10 名
第 106 回	11 月 11 日(水)	「パーキンソン病高齢者における低栄養の要因について」	13 名
第 107 回	平成 28 年 2 月 10 日(水)	「注射を拒否する認知症高齢者への関わりについて」	8 名
第 108 回	3 月 9 日（水）	「誤嚥性肺炎で入院し活動耐性が低下した高齢者への看護」	11 名

参加者：医療従事者対象（石川県内の高齢者ケアに関わる看護師（専門看護師・認定看護師）、本学大学院修了生、大学院生、在学生、老年看護学教員、施設管理者）

4. 事例検討会参加者の評価（アンケートより一部抜粋）

＊事例を振り返り、皆さんの意見をいただくことでリフレクションでき、次の実践に活かせた。
＊自分と異なる視点からの意見をいただけ、対象理解が深まった。
＊他職種の方からの意見が参考になる。
＊対象を広い視点で捉える力をつけさせていただいている。
＊さまざまな知識を得ることができた。

5. 事例検討会の成果

高齢者は、健康障害に加え、加齢に伴う心身の変化も複合して症状およびそのケアについては複雑である。それ故に、看護職が高齢者、家族や環境といった広い視野をもち、質の高いケアの提供が求められている。本検討会では、現場から実際の事例を提供していただき、老人看護 CNS、認知症認定看護師といった専門家や、施設管理者、病棟師長など多施設、多職種間での情報交換ができ、複雑な事例を読み解く糸口を得て、臨床に持ち帰っていただくことで看護の質の向上につながっている。

また、本学の大学院修士課程、CNS 過程の院生が研究課題や実践を報告する場としても機能しており、研究ケアの専門家としての実践能力を育成・向上する継続的な学習の場ともなっている。参加者のアンケート結果では、回答者全員が継続を希望されていることから、継続的な学習の場になっていると考えられる。

１－２－５　がん看護事例検討会（北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プラン）

1. 事例検討会の趣旨

がん看護の質の向上を図るため、がん看護専門看護師と共に、日々のがん患者様やそのご家族への看護実践の中で遭遇する困難事例について、施設の垣根を越えて意見交換を行うことを通して、北陸３県のがん看護の質の向上を図るケアの専門家としての実践力を育英・向上する場とする。

2. 資料の取り扱いについて

＊　事例検討会中の撮影・録音は行わない。
＊　参加者は、話し合われた内容について不用意に他言せず、施設や個人の情報を保護する。
＊　日本看護協会の倫理綱領の基本姿勢を遵守する。

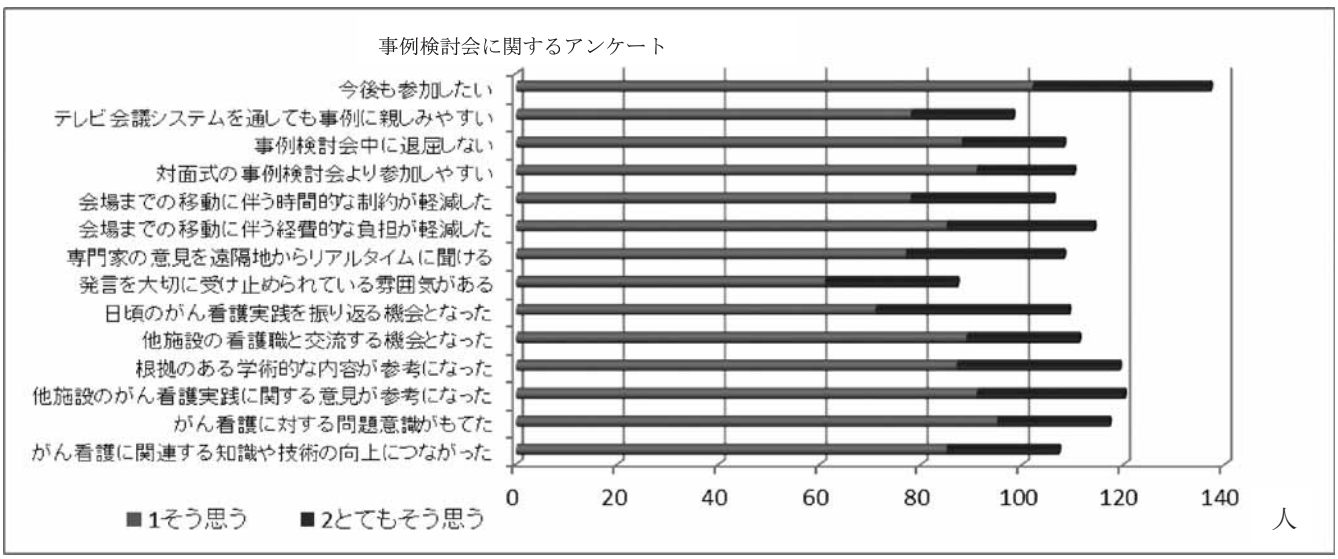
3. 実施状況

平成 27 年度は 5 月から計 8 回実施し、参加者総数は 831 名であった。

回	月　日	テーマ	参加施設	参加人数
第１回	27.5.12(火)	子宮癌合併妊娠後の患者への支援	11 施設	135 名
第２回	27.6.2(火)	放射線化学療法によって生じた疼痛のセルフマネジメント支援	11 施設	105 名
第３回	27.7.7(火)	セツキシマブの皮膚障害に対するセルフケア支援が困難な事例	11 施設	81 名
第４回	27.10.6(火)	痛みのコントロールに難渋し、人工肛門造設を選択した事例	11 施設	105 名
第５回	27.11.10(火)	患者と家族の療養の場の選択における意思決定支援	11 施設	71 名
第６回	27.12.1(火)	壮年期乳がん患者の終末期を支えるために	11 施設	81 名
第７回	28.2.2(火)	緩和医療を勧められ､自分の思いを表現しなくなった若年患者への関わり	11 施設	171 名
第８回	28.3.8(火)	在宅緩和ケアを受ける胃がん患者との関わり－希死念慮に焦点を当てて－	11 施設	82 名

参加施設：(5 大学+15 病院）金沢大学・富山大学・福井大学・金沢医科大学・石川県立看護大学・石川県済生会金沢病院・金沢赤十字病院・金沢市立病院・金沢医療センター・恵寿総合病院・小松市民病院・公立能登総合病院・富山県立中央病院・富山市民病院・富山赤十字病院・市立砺波総合病院・高岡市民病院・済生会富山病院・済生会高岡病院・福井県済生会病院

4. 事例検討会参加者の評価（アンケートより一部抜粋）



5. 事例検討会の成果

がん看護事例検討会は北陸３県の 20 施設をテレビ会議で繋ぎ、遠隔地からも参加できることが大きな特徴である。内容は「がん看護事例検討会」（60 分）とがん看護専門看護師による「ミニレクチャー」（20 分）で成り立ち、教員や大学院生、がん看護専門看護師が参加し、意見交換されている。今年度は、２月の開催では、がん体験者でもある西村元一先生に、ミニレクチャーをお願いし、がん体験者でもあり医師の視点から、自身のがんの進行状況、苦悩の内容とその際にどのようなかかわりを求めていたかについて話しをしていただいた。北陸の冬は寒く、当日仕事終わりではなかなか集積できない 171 名が参加し、意義ある時間を過ごすことができたと思う。

今後も、地域の看護師や医療従事者のために、テレビ会議システムによる事例検討会を開催し、仕事終わりでも、自身の施設や近隣の施設に立ち寄り学習ができる環境の整備をしていきたい。

1－3　相談サービス事業

1－3－1 各種研修会等への講師派遣事業

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体(看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の任意団体	その他	計
回数	33	4	3	0	0	3	43

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	教授 高山　成子	H27.7.11 13:00 ～ 14:30	しいのき迎賓館	学都石川の才知「認知症の人とのこみゅにけーション」	大学コンソーシアム石川	6
	講師 川村　みどり	H27.6.26 16:00 ～ 17:00 H27.11.20 16:00 ～ 17:00 H28.2.19 17:30 ～ 19:00	公立能登総合病院	看護研究の指導等	公立能登総合病院	1 1 1
2	教授 村井　嘉子	H27.7.11 13:30 ～ 15:30 H28.2上旬	能美市立病院	看護研究の指導・講評	能美市立病院	1 1
3	教授 西村　真実子	H27.7.27 13:30 ～ 16:30 H27.7.30 13:30 ～ 16:30	石川県立看護研修センター	講師「子供の成長発達・子育てにかかわる看護」 講師「疾病や障害を持つ小児の家族への支援」	公益社団法人 石川県看護協会	2 2
4	准教授 石川　倫子	H27.6.12 17:30 ～ 19:00	独立行政法人地域医療機能推進機構　金沢病院	看護教員企画に関する講師	独立行政法人地域医療機能推進機構　金沢病院	1
5	准教授 中田　弘子	H27.5月 ～ H28.3月	独立行政法人地域医療機能推進機構　金沢病院	看護研究の指導等	独立行政法人地域医療機能推進機構　金沢病院	1
6	助教 曽山　小織	H27.6月 H27.10月 H28.3月	珠洲市総合病院	看護研究の指導等	珠洲市総合病院	1 1 1
7	助教 曽根　志穂	H27.5月 17:30 ～ 18:30 H27.6月 17:30 ～ 18:30 H27.7月 17:30 ～ 18:30 H27.8月 17:30 ～ 18:30	国民健康保険　志雄病院	看護研究の指導等	国民健康保険　志雄病院	1 1 1 1
8	教授 彦　聖美	H27.4.1 ～ H28.3.31	芳珠記念病院	看護研究の指導	芳珠記念病院	1
9	講師 林　静子	H27.6.3 17:30 ～ 19:30 H27.7.15 17:30 ～ 19:30 H27.7.16 17:30 ～ 19:30 H27.10.20 17:30 ～ 19:30 H27.10.22 17:30 ～ 19:30	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	看護研究の指導	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	1 1 1 1 1

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
10	講師 木森　佳子 助教 森田　聖子	H27.6.26 13:30 ～	公立能登総合病院	看護研究の講評等	公立能登総合病院	1
11	准教授 彦　聖美	H27.7.31 14:00 ～ 17:00 H27.11.19 14:00 ～ 17:00 H28.2.18 17:30 ～ 19:30	公立つるぎ病院	看護研究指導・講評	公立つるぎ病院	1 1 1
12	准教授 織田　初江	H27.9月 10:00 ～ 17:00 H27.9月 10:00 ～ 17:00 H27.9月 10:00 ～ 16:00	石川県健康福祉部	新任保健師研修	石川県健康福祉部	3 3 3
13	准教授 阿部　智恵子	H27.6.22 13:30 ～ 15:10	能登町内浦福祉センター	講師「地域と暮らしと健康いつまでもイキイキと生活するために」	能登町ボランティア連絡会	6
14	講師 中田　弘子	H27.6月 H27.9月 H28.2月	羽咋病院	事例検討会	羽咋病院	1 1 1
15	准教授 谷本　千恵 講師 川村　みどり 助教 大江　真吾 助教 清水　暢子	H27.6月 ～ H28.3月	石川県立高松病院	看護研究の指導等	石川県立高松病院	1 1 1 1
16	教授 川島　和代	H27.9.2 16:00 ～ 17:15	恵寿金沢病院	研修会講師「科学的看護論より患者理解の視点を学ぶ」	恵寿金沢病院	1
17	教授 丸岡　直子	H28.2.20 13:00 ～ 16:00		北陸地区認定看護管理者会実践報告会	認定看護管理者会	2
18	講師 林　静子	H27.10.24 13:30 ～ 14:35	白山市鶴来総合文化会館クレイン	看護研究発表の講評等	公益社団法人 石川県看護協会	2
19	講師 中田　弘子	H27.11.26 14:00 ～ 14:30	石川県立中央病院	研修会講師「効率的な学生へのかかわり方の実際」	石川県立中央病院	1
20	助教 森田　聖子	H27.12.13 10:00 ～ 12:00	柳田山村開発センター	笑いヨガについて、講義と実技	能登町立柳田公民館	6

１－３－２　病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）

地区別	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
加賀地区	公立つるぎ病院	看護研究指導・講評	准教授	彦　聖美	3
	芳珠記念病院	看護研究講評	准教授	彦　聖美	1
	能美市立病院	看護研究指導・講評	教授	村井　嘉子	2
金沢地区	恵寿金沢病院	研修会講師	教授	川島　和代	1
	独立行政法人地域医療機能推進機構 金沢病院	研修会講師 看護研究指導	准教授 准教授	石川　倫子 中田　弘子	1 1
	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究指導	講師	林　静子	5
	石川県立中央病院	研修会講師	准教授	中田　弘子	1
	珠洲市総合病院	看護研究指導	助教	曽山　小織	3
	国民健康保険　志雄病院	看護研究指導	助教	曽根　志穂	4
	公立能登総合病院	看護研究指導	講師 助教	木森　佳子 森田　聖子	1
	公立宇出津総合病院	看護研究指導	講師	川村　みどり	3
	公立羽咋病院	事例検討会	講師	中田　弘子	3
	石川県立高松病院	看護研究指導	准教授 講師 助教 助教	谷本　千恵 川村　みどり 大江　真吾 清水　暢子	4

２　地域連携・貢献事業

２－１　地域連携事業

２－１－１　来人喜人（きときと）里創りプロジェクト事業

実施目的：

能登町は産業基盤が脆弱であり、かつ就学、就職時に若者が町外に流出し、少子高齢化、過疎化が急激に進行している。2010 年度の高齢化率は能登町の 40.1%、2035 年度予測は 52．6%であり、生産年齢人口が高齢者人口を大幅に下回りつつある。それに伴って、地域住民の健康な生活を支えていた地域のシステム、伝統文化、コミュニティの絆、地域産業などが減退しつつある。そうした現状を踏まえると、能登町の最大の課題は少子高齢化と高齢者等の医療、介護である。その補完的な解決策として交流人口の拡大と健康に関わる社会的文化的な活動の強化が考えられる。本プロジェクトでは看護大学の特色を踏まえ、健康問題、特に健診率向上キャンペーンを展開すると同時に、運動と食事生活に関わる文化、社会活動において地域で活動する諸団体と連携、交流しながら住民の健康づくりをサポートする。

実施状況：

H27

4 月～12 月　ロコモティブシンドローム予防事業

5 月 10 日　「第 29 回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。

10 月 24 日～25 日　石川県立看護大学学園祭にて「クライネメッセ」の開催。

実施成果：

・能登町健康福祉課、健康大会事務局、能登高校地域創造学科、能登町社会福祉協議会など能登町の連携団体と協力しながらその活動を支援することができた。
・歩こう走ろう健康大会では、大学か学生、教職員の参加、さらに大学近辺のかほく市からの参加者も同行し、地域間交流ができた。
・大会での健康キャンペーンでは、学生も健康チェックに参加し、大会参加者や地元住民との交流ができた。
・大会に健康キャンペーンを継続して参加してきた結果、健康チェックの参加者が年々増加している。
・大学祭でのクライネメッセでは、福祉施設の授産商品販売で地域福祉との交流の場となった。
・能登町と看護大学が連携して住民の健康を支援するネットワーク基盤ができた。
・看護大学の学生、教職員の能登への関心が高まった。
・能登町健康福祉課と共催で、ロコモティブシンドローム予防事業として、各人の体力・体組成・筋力を測定し、筋肉量に合わせた運動プログラムを提示し、筋力増強を試みた。
・その結果、骨格筋量、基礎代謝量の有意な増加、体力測定の項目のうち、握力、上体おこし、椅子のすわり立ちに有意な効果が認められた。

今後の取組予定：

・引き続いて住民の健康づくりに意義があると思う事業をこれまで培ってきた連携のネットワークを使って実施する。
・本事業とそこで育んできた枠組みを基盤として、本学が一つの目標とする「地域の健康づくりにアプローチできるグローカルな視野を持った人材を育成」（ヒューマンヘルスケア人材育成プロジェクト）に展開、発展させたい。

２－１－２　健康応援倶楽部・健康推進モデル事業

実施目的：

PC や携帯電話があれば、好きな時間に好きな場所からインターネットを経由して身体状態を入力できるシステム「毎日健康倶楽部」を構築している。このシステムによって、体組成、身体活動量、食事量を一元的に把握し、週単位での運動処方や食事指導などを継続的に行い、対象者が身体状況を入力してから、評価・アドバイスまでを短期間でフィードバックする双方向コミュニケーションが可能となっている。

本年度は、かほく市との包括協定に基づく、健康福祉課、長寿介護課、生涯学習課と垣花准教授担当の共同事業、「50 代をターゲットにした健康教育の効果に関する研究―インセンティブの付与に着目して」の事業のなかで、日々の運動を継続する手段として「毎日健康倶楽部」の利用を促した。

実施状況：

Ⅰ期：平成 27 年 6 月～平成 27 年 12 月

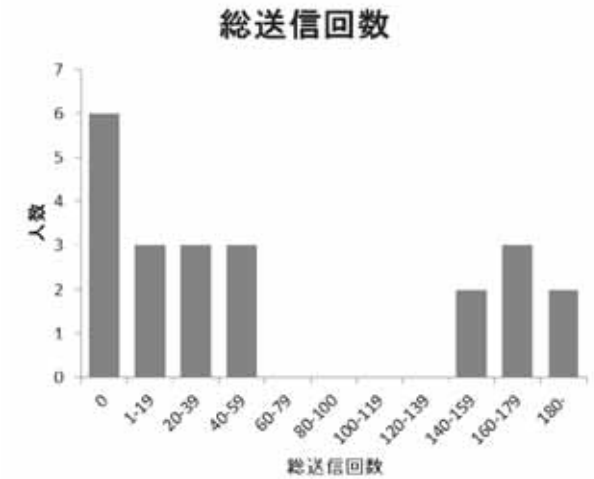
・登録者 22 人

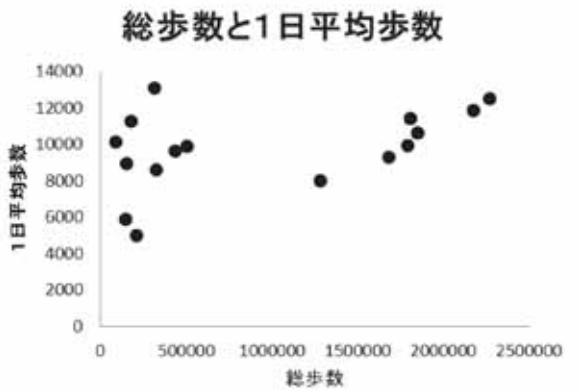
Ⅱ・Ⅲ期：平成 27 年 9 月～平成 28 年　3 月

・登録者　6 人

実施成果：

Ⅰ期

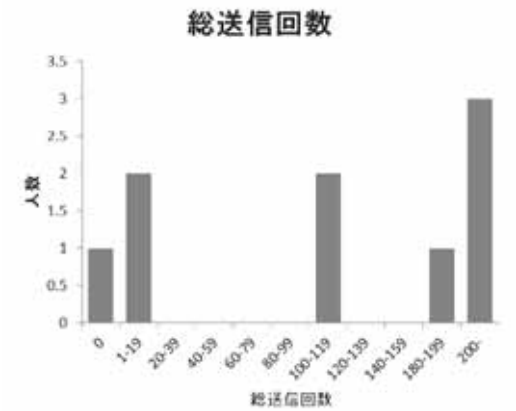


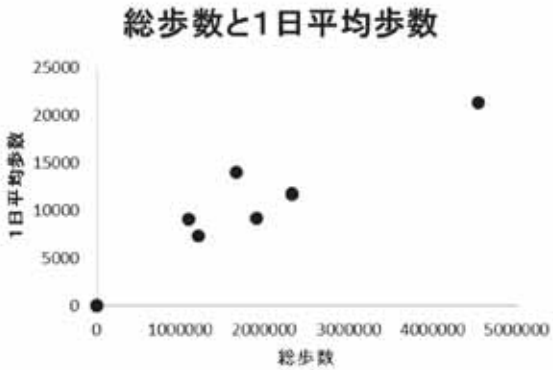


・送信回数（183 日間）：最高 181 回、最低 0 回（平均 68 回）

・1 日の歩数：平均 9,775 歩（送信回数 0 回 6 人を除く）

Ⅱ・Ⅲ期





・送信回数（213 日間）：最高 213 回、最低 119 回（平均 170 回）
・1 日の歩数：平均 12,125

「毎日健康倶楽部」の利用者は、6 ヶ月の間、ほぼ 10000 歩を歩くことが出来た。

今後の取組予定：

平成 28 年度の健康応援倶楽部・健康推進モデル事業は、引き続き、かほく市民の健康増進事業として展開していく予定である。

２－１－３　棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

実施目的：

津幡町興津地区が有する社会資源である「食」・「緑」・「健康」を有効に活用することで都市と田舎の異世代・異業種との交流の促進を図ること。併せて、地域の人材育成を進め、異世代・異業種の団体と連携しながら持続可能な地域をつくることであった。

実施状況：

平成 25 年からの継続

・　「興津を元気にする協議会」を継続して運営し、住民約 20 名および学生 10 名は年に 4～5 回の頻度で地域づくり活動を実施した。

平成 27 年度

・　住民と学生の交流茶話会（4 月）
・　形態・体力測定（5 月）
・　民泊体験会（6 月）
・　土砂崩れを想定した避難訓練（8 月）
・　全戸を対象に健康状態の聞き取り調査（8 月、9 月）
・　彼岸花のオーナー制度の実施（8～10 月）
・　秋のしあわせ感謝祭（10 月）
・　興津そば祭り（12 月）

実施成果：

・　民泊体験会では、23 名の学生が 6 戸に分かれて民泊を体験し、中山間地の風土や自然を学ぶことができた。
・　避難訓練では、12 名の学生と 23 名の住民が連携し、①一時避難所への集合・点呼、②土砂崩れのモデルを作り避難救助、③骨折や止血の応急処理、④模擬負傷者の担架搬送を体験することができた。
・　健康状態の聞き取り調査を実施した結果、避難指示が出た際に徒歩での移動が困難を来す住民の居住地を示す「避難支援マップ」を作成することができた。
・　秋のしあわせ感謝祭では、すべての住民が準備または当日の運営に関わり、学生と連携して祭りを円滑に開催することができた。
・　興津そば祭りでは、20 名の住民と 5 名の学生がそば打ちを体験し、打ったそばを自分たちで食するイベントを開催することができた。
・　学生は、住民と協働したむらづくりを通した社会人基礎力の成長をスライドにまとめ、「社会人基礎力育成グランプリ」中部地区大会で準優秀賞を受賞することができた。

今後の取組予定：

住民と学生の交流イベントを通じて、高齢農家のやる気・元気・活気の創出につなげるとともに、「彼岸花オーナー制度」を継続することを計画している。

２－１－４　いきいき美人大学校

１．実施目的：

かほく市では、「健康クラブ」と称する高齢者による健康の維持・増進を目指した自主的なグループ活動が行われている。活動の内容は、リズム体操、ストレッチ体操、ダンスなどであり、講師の指導のもと１時間ほどの活動を行っている。参加者の目的は、踊りをうまくなりたい、孫と一緒に遊べる体力を保ちたい、奉仕活動を続けられるように元気でいたい等さまざまで、好奇心や関心に基づく内発的動機づけを持ちながら楽しく活動している。

このような内発的動機づけに基づく健康意欲を後押しすることを目的に、「健康クラブ」に参加する高齢者を対象に、楽しみながら自分の健康状態を知ることができる生涯学習の場を提供することを目的とする。

２．実施状況：

平成 19 年からの継続

・　地元の総合型地域スポーツクラブと連携して、市内の「健康クラブ」に通う高齢者をバスで看護大学へ送迎する。約 2 時間の健康教室を、看護大生が中心となって開催する。

平成 27 年度

・　大学にある健康測定機器を使った健康診断
・　レクリエーションゲームのよる身体と頭を使う体操
・　工作や手芸の共同作業を通した交流
・　健康教材の使い方のデモンストレーションやロールプレイ等を取り入れた健康知識の理解

３．実施成果：

・　夏と春にそれぞれ 4 回ずつ健康教室を開催した。
・　夏の参加者数は 77 名、春の参加者数は 83 名であった。
・　夏の開催日と参加者数は、8 月 20 日が 18 名、8 月 21 日が 23 名、9 月 4 日が 24 名、9 月 25 日が 12 名であった。
・　春の開催日と参加者数は、3 月 4 日が 33 名、3 月 17 日が 11 名、3 月 18 日が 26 名、3 月 25 日が 11 名であった。
・　学生にとっては、地域住民の健康の維持・増進という社会貢献を果たすと共に、コミュニケーション能力を磨く機会となった。
・　学生にとっては、授業で学んだ健康づくりに関する知識やスキルを振り返るとともに、整理することにつながった。

４．今後の取組予定：

引き続き継続して開催できるよう、学生は事前学習でイベントの内容を十分に吟味し、それを運営会議で諮る。係わる全員の学生で知恵を出し合いながら、参加者が満足するような活動になるよう試行錯誤を重ねて健康教室の開催プランを立案する。

２－２　生涯学習講座

２－２－１　石川県立看護大学公開フォーラム「子育てしやすい街づくり」

１．実施目的：

少子化が進む中、安心して子どもを産み、育てることのできることが、家庭や地域の喜び・楽しみでもある。「ゆとりのある子育て」、「育児不安のない子育て」、「地域みんなでの子育て」が実現できる街づくりが、その地域の活性化につながるのではないかと考える。そんな街づくりについて、専門家だけではなく地域住民、行政が一緒になって考える場にするのが目的である。

２．実施状況：

日時：平成 27 年 8 月 29 日（土）10:00～11：30

場所：石川県立看護大学　基礎看護学実習室

内容：講演「つながり合い・響き合うまちづくり」

講師：まちひとぷら座かんかこかん運営委員長　伊藤早苗氏

ワークショップ　わが街の子育てについて

・「気になっていること」「問題だと思うこと」

・「自分たちに何ができるか」「どんなことをやったらいいのか」

３．実施成果：

地元かほく市をはじめ、内灘町や金沢市も含め 52 名の参加者があった。「かんかこかん」は気軽にだれもが立ち寄ることのできる「まちの縁側」として毎日、賑わいを生み出している。また小学生からお年寄りまで幅広い年代の人々が、それぞれの立場で知恵と力を出し合って温かい街を作っているという話は、参加者にも大いに刺激になった。

続いて行ったワークショップでは８グループに分かれて、わが街の子育てについて「気になっていること」「問題だと思うこと」、「自分たちに何ができるか」「どんなことをやったらいいのか」をテーマに各グループでディスカッションを行った。「地域の方とつながりたい」「イクメンの日を作ったら」「先ずは挨拶から」「得意な事を登録して困った人が利用できる場所」など多くのアイデアが出た。

４．今後の取組予定：

今回のフォーラムをきっかけに、幅広い年代の人たちが子育てについて交流し考えることができる場を作っていけたらと感じた。乳幼児を育てている世代にもより多く参加できるよう日時を工夫していきたい。

２－２－２　公開研究会「死生観とケア」

実施目的：

人間の死生を根本的に規定しているものの一つは個人と地域の文化に特有の死生観である。本研究会ではこれまでも終末期ケア、高齢者ケアに関わる人々だけではなく、自己の死や看取りに関心をもつ地域住民の方々に、「死生観とケア」について理解を深め、考える場を提供してきた。

高齢化社会を迎え、死や看取りについて考える機会がますます増えている。平成 27 年度の本公開研究会「ヨーロッパにおける看取りの諸相」では、ヨーロッパ各国におけるホスピス・緩和ケアと看取りに造詣が深い研究者を招き、理解を深めると同時に、わが国、特にこの地域における看取りのあり方について考える機会とする。

実施状況：

日付	時間	場所	参加人数	テーマ	講師
5 月 17 日（日）	14:00～16:00	大講義室（看護大）	64 名	イタリアにおける看取りとその文化的背景	福島智子（松本大学人間健康学部准教授）
6 月 28 日（日）	14:00～16:00	大講義室（看護大）	59 名	フランスにおける看取りとその文化的背景	伊達聖伸（上智大学外国語学部准教授）
10 月 4 日（日）	14:00～16:00	大講義室（看護大）	37 名	スウェーデンにおける看取りとその文化的背景	斎藤美恵（西部文理大学看護学部講師）
11 月 29 日（日）	14:00～16:00	大講義室（看護大）	44 名	イギリスにおける看取りとその文化的背景	諸岡了介（島根大学教育学部准教授）
平成 28 年 2 月 7 日（日）	14:00～16:00	大講義室（看護大）	56 名	ドイツにおける看取りとその文化的背景	浅見洋（石川県立看護大学教授）

実施成果：

高齢者ケア、終末期ケアに関する知見を深めると同時に、関心をもつ人々の情報交換を行い、それによって地域の看取り考える場となった。

２－２－３　あかちゃんをお空へみ送った方の自助グループに対するサポート活動

１．事業の目的： あかちゃんを亡くした方がアクセスしやすいような体制作りとお話会を開催しあかちゃんを亡くした方の自助グループ活動を支援する。

２．目　　標： 1.お話会の運営をサポートする。
2.体験者、臨床、地域からの相談があった場合、4つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

３．実 施 状 況：

・お話会開催　日時・場所・参加人数

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くした方

回数	月日	時間	主催	場所	人数
第1回	H27. 4. 26（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」	7名
第2回	H27. 6. 1（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場　庁議室	13名
第3回	H27. 7. 26（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県女性センター	9名
第4回	H27. 10. 5（月）	10:00～13:00	小さな天使のママの会	津幡町役場　庁議室	9名
第5回	H27. 10. 25（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	金沢市中央公民館　第1会議室	6名
第6回	H28. 1. 24（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県女性センター	10名
第7回	H28. 2. 8（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場　庁議室	11名

・適宜メール相談・電話相談・面談

・ひまわりの会　自殺予防活動　石川県主催　自殺予防対策講演会　参加

H27. 11. 29(日) 13:15～16:30　　H27. 2. 28(土) 12:30～16:30

・18トリソミー写真展を金沢で開催するにあたってのサポート(臨床への協力依頼・当日運営スタッフ)

・体験者の話を聞く場: 母性看護方法論の特別講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。
第14回ペリネイタル・グリーフケア検討会にて上記特別講演のビデオ上映会を実施

窓　　口：米田昌代(石川県立看護大学・天使のゆりかご)
自助グループ代表:安田文子(ひまわりの会)　丹保美枝(SIDS 家族の会北陸支部)　村中智恵・泉早苗(小さな天使のママの会)　藤田美保（ハートシェアの会)

４．実 施 内 容：

広報活動：石川県こころの健康センターの冊子『相談対応のための手引き　自殺未遂者への支援の方法』に掲載していただいた。また、全国の赤ちゃんを亡くした方の自助グループのネットワークである天使がくれた出会いネットワークの方とセミナーで顔を合わせる機会があり、交流を深めることができた。

お話会の開催：ひまわりの会は3ヶ月に1回（1・4・7・10月の第4日曜日)、小さな天使のママの会は4ヶ月に1回（2・6 ・10月の第1月曜日）予定通り開催した。

個別相談：体験者からの問い合わせに応じ、適宜自助グループ、相談体制に対する情報提供を行った。個別面談は1件であり、継続フォロー中である。

自殺予防活動 ： ひまわりの会の代表の方が石川県が主催する活動に参画しており、メンバーが企画に参加した。今後も県と民間団体が協力して実施する自殺予防活動に協力していく予定である。

・家族同士の橋渡し: 体験者が自分に近い背景の方と話したいという希望があり、橋渡しした。

５．評価と今後の課題：

広報活動：いろいろな冊子に掲載していただくことで、活動を広めることができ、利用される方も増えると考えられる。今後も機会があれば関連の広報冊子に掲載していただくこととする。短時間では全国ネットワークの方々と交流する機会があり、顔を合わせる関係づくりと今後の連携強化につながったと考えられる。

お話会の開催：今年度は定例会のみの年 7 回の開催となった。SIDS 家族の会は、2013 年より代表の都合で、お話会開催が休止状態になっており、小さな天使のママの会を中心に相談に応じている。ひまわりの会と天使のゆりかごでお話会は定期的に開催していくこととし、新規相談者のニーズがあれば今後も不定期に開催したいと考えている。

個別相談・体験者への橋渡し：お話会参加にいたらず、メールでの対応で終わってしまう体験者もいる。お話会参加にいたらずとも、いつでも話しを聞いてもらえる場があるということが重要であると考えるため、体験者のニーズにそって 4 つの自助グループが協力して、関わっていくこととする。顔がみえない、一方的なやりとりになりがちであるため、十分注意をはらいながら対応していく。面談を希望した場合の場所の配慮は検討課題である。

家族同士の橋渡し:体験者の希望があって、紹介する場合に、対象者の背景・状況・2 人の相性を考えながら、お互いにとって話をすることで少しでもプラスに転じることができる関係になるか判断が難しいところである。今回はトラブルなくつながってはいるが、紹介後も双方の心理面に注意しながら、フォローしつつ、個別性、ニーズに合わせて今後も考えていければと思う。

２－２－４　祖父母の楽しい上手な孫育て教室

１．事業の目的：現在の子育て事情（育児方法や考え方）の情報を取り入れながら孫育てに関する理解を深める。若夫婦のよき援助者として、また祖父母自身が楽しみながら、適切な孫育児ができる。

２．目　　標：1．日ごろ、孫育てに関する悩みや疑問を参加者全体で話し合うことにより、参加者同士の交流を図り、気持ちを軽くしたりして経験の共有をはかる。

2．他の参加者と話しあいやアドバイスの交換等により多角的な見方を知り、各人が良いと思える方法を考えることができる。

3．いまどきの孫育て、子育て、若夫婦等に対する付き合い方等の情報の入手をおこなう。

３．実 施 状 況：

開催日時：平成 27 年 8 月 1 日（日）13 時 30 分～16 時 00 分

実施場所：石川県女性センター　2 階　研修室 1

講　　師：吉田和枝、米田昌代、曽山小織

参 加 者：地域住民（0-3 歳の孫をもつ祖父母）14 名

４．実 施 内 容：

参加者の経験の共有を図る話し合いの前に、パワーポイントにて今どきの育児に関する情報、事故や危険防止に関することを情報提供した。話し合いにおいては、参加者のプライバシーを守るため事前に準備した（花の名前の）名札をつけてもらい、お互いに花の名前で呼び合うこと、個人情報を漏らさないように説明し了解しあい行った。3 班に分かれ各参加者の自己紹介に続いて参加者が問題提起した内容（孫との接し方、最近の子育て、嫁・娘との付き合い方等）について話し合った。教員は各参加者の意見を全体の話題となるように進行し、子育て・孫育ての情報を提供し説明も行った。話し合い後、孫の事故や危険防止のためにビデオ上映も行った。最後に本教室に関するアンケート調査（匿名性）を行った。

５．評価と今後の課題：

今年度もアクセス・駐車場の面で女性センターを会場に開催した。研修室の広さやスタッフの人員等から 14 名を広報いしかわで公募した。応募者は 19 名で、5 名がキャンセル待ちであったため、開催週に地域ケアセンターから全員参加可能の旨を連絡してもらった。2 名から参加できないと返答があり、さらに他の 2 名からキャンセルの連絡が教室当日に女性センター事務所にあった。例年、教室当日に地域ケアセンターの方へキャンセルや申込みの電話があるようだが、週末であるため電話に対応できておらず、女性センターに連絡があると事務所職員が困惑しており今後の検討課題である。

教室の内容は、先にパワーポイントを用いて最近の子育て事情に関する説明を行い、全般的な情報を知ったうえで参加者同士の話し合いを行ったため、現在の子育てと参加者自身の子育てとの違いを交えながら話し合うことができたのではないかと考える。アンケート結果では、14 名中 12 名が提出(85.7%)し、教室全体を通して「たいへん良かった」「役に立った」と答えた人は 9 名(75.0%)であった。役に立ったこと・良かったこととして、「今と昔の違いを知ることができた」「様々な親の立場を知ることができた」「娘にズバッと言わないで、穏やかに言うと良いことがわかった」「孫の成長に応じた事故予防について再確認しようと思った」等が自由記載欄に挙げられていた。教室の進め方は、話し合いを交えた現在の方法に対して全員が支持していた。開催時間の長さについては「ちょうどよい」が 8 名(66.7%)、「やや短い・短い」が 3 名(25.0%)だった。開催の希望曜日は日曜日午前を希望する人が 8 名(66.7%)、土曜日午後を希望する人が 5 名(41.7%)だったが、会場予約の関係上、引き続き土曜日午後に開催していきたい。

教室への今後の希望として、「孫の年齢が 1 歳前後の内容だけではなく、2 歳から 5 歳くらいの内容も希望する」「祖父母の悩みや付き合い方を話し合える機会がほしい」などが挙げられており、次年度はファシリテーション時にこれらを意識して行うこととする。

２－２－５　　子育て　どろっぷ・イン・さろん

1. 目的

子育て中の母親には、子どもと離れて過ごす時間や場所が必要であることが、これまで実施してきた子育て支援プログラム：NP（Nobody's Perfect）やニーズ調査の結果から分かっている。そのため、母親が子どもと離れて過ごす場所を提供することと、NP プログラムを体験した母親がこれまでの NP グループの枠組みを越えて集まり、訓練されたファシリテーターの進行のもとでテーマを決めて話し合う場をもつことで、日ごろの子育てについて語り、悩みを共有し、自分に役に立ちそうな考えや具体的なやり方、心の持ちよう等を得る機会になることを目的とする。

2. 開催場所　北陸スウェーデンハウス　金沢モデルルーム（金沢市）

3. 実施状況

1 ）どろっぷ・イン・るーむ

託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応する。

対象者:子育て中の母親

スタッフ：西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曽山小織、千原裕香、本部由梨、伊達岡五月（院生）

開催日時と参加人数:

回数	開催日	時間	参加人数	託児児童数
第１回	H27.8.4（火）	10：00～12：00	５名	10
第２回	H27.9.8（火）	10：00～12：00	７名	3
第３回	H27.10.6（火）	10：00～12：00	７名	4
第４回	H27.11.10（火）	10：00～12：00	６名	4
第５回	H27.12.1（火）	10：00～12：00	６名	3

2）NP 親育ち・子育ちを考える会

託児を行い、NP プログラムの方式を取り入れたグループミーティングを行う。

対象者：NP プログラムに参加経験のある子育て中の母親

ファシリテーター：西村真実子、金谷雅代

記録等：米田昌代、曽山小織、千原裕香、本部由梨、伊達岡五月（院生）

開催日時と参加人数・話し合われたテーマ:

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第１回	H27.8.4（火） 13：00～15：00	自分の気がかりを話そう・みんなの気がかりを聞こう 子どもに自己肯定感をつけてあげるには？	８名
第２回	H27.9.8（火） 13：00～15：00	子どもの気持ちを受け入れるということ	９名
第３回	H27.10.6（火） 13：00～15：00	子どもへのかかわり方 - よい叱り方、聞き入れてもらうには -	10 名

第 4 回	H27.11.10（火） 13：00～15：00	子どもの友達関係について	6 名
第 5 回	H27.12.1（火） 13：00～15：00	ママ友関係 きょうだいへのかかわり方	10 名

4. 評価と今後の課題

1）どろっぷ・イン・るーむの評価

他の参加者との交流を望む参加者は、和やかに談笑し、交流していた。他の子育て経験者から話が聴けることで、自分自身の子育てを見つめなおしている様子が伺えた。また、一人で過ごせるスペースが確保できていたことから、ゆったりと一人の時間を持てた参加者もあった。

2）NP 親育ち・子育ちを考える会の評価

参加者からは、「自分の気持ちの整理ができる」「今日もらったヒントを活用して、楽しい毎日を過ごしたい」「同じようなことで悩んでいたことが分かり、分かっただけでなく意見もきけた」など、参加者同士の話し合いによってエンパワーされ、子育てを前向きに考えられている様子が伺えた。

3）今後の課題

どろっぷ・イン・るーむのような形態の支援で、子どもを少しの時間預け、一人になれる、大人（子育てしている母親仲間）だけで話ができることの効果が認められる。

また、NP 親育ち・子育ちを考える会は、子育ての困った場面における考え方や具体的な対応経験を共有することが、エンパワーにつながり、育児不安や困難に悩む母親に対して効果があるといえる。

今後は、母親のより一層のエンパワーと育児困難の改善に向けて継続して取り組んでいく。

２－２－６　おやこのたのしいじかん

1. 事業の目的

本事業は、がんに罹患した母親が子どもと一緒に絵本を作成し、またアート・セラピーなどの楽しい時間を過すことによって、日ごろは話せない母親の気持ちや子どもの気持ちを伝え合い、親子の絆を深め、今まで以上に大切な時間を過すことができるよう、支援することを目的としている。また、母親の病気に対する不安や子どもや周囲との関わりにおける悩みを共有できる場としての機能を果たせるよう、母親同士の対話タイムとして交流の時間を設けている。

2. 実施状況

・昨年度の実施回数は３回、参加者数は母親が 11 名、子どもが 16 名（3 歳～13 歳）であった。（下図参照）第１回と３回は親子での絵本の作成、第２回目はカナダＢＣ州公認アート・セラピストを講師に向かえ、アート・セラピー体験を行った。

・担当者：牧野智恵（石川県立看護大学）・川端京子（石川県立看護大学）・山口節枝（乳がん患者会 BCSG 代表）・松本友梨子（福井済生会病院）・北本福美（金沢医科大学）・朴裕美（音楽療法士）・石川県立看護大学４年生２名

日時	場所	参加者数【母親】	参加者数【子ども】
H27.5.31（日）13：00～15：00	ゆーあい福井	3 名	5 名
H27.7.12（日）13：30～16：00	ゆーあい福井	6 名	8 名
H27.10.4（日）10：00～12：00	玉川こども図書館	2 名	3 名

3. プログラム内容（2016 年 10 月 4 日の例）

時間	内容
13：00－13：10	アンケートの記入
13：10－13：20	音楽でリラックスタイム
13：20－14：10	アート・セラピー
14：10－14：50	母親同士での対話タイム
	子どもは「アート」で遊ぶ＊母親同士の話し合い中に別室で行う
14：50－15：00	アンケートの記入

4. 評価と今後の課題

今年度は参加者が継続して参加できるよう年間計画を組み、１年に３回の企画を実施した。１回目と２回目には同じメンバーが参加したこともあり、母親同士の交流の輪も広がっていったように感じた。また、活動の場も金沢から福井に広げ、広報活動にも力を入れた結果、昨年より参加者数の増加が見られた。

子どもが初めての場所でも入っていけるように、音楽を用いたり、絵や人形を作るなど親しみやすい材料を用いた工作などをすることによって、うちとけ楽しんでいる様子が伺えた。最後には「また来たい」との声も聞かれた。

母親同士の対話では、日頃抱えている思いの表出や子どもをもつ母親だからこその悩みが語られる場面があった。また、他者の様々な体験を聞くことによって新たな情報や知識を得る場となっていたとも考えられる。このような子どもをもつがん患者の支援の場は必要と考えるため、次年度以降も、親子が集い参加できるイベントを継続して提供していく。

２－３　ワンストップサービス

１．事業の目的：

本事業の目的は、石川県内の市町村、企業、ＮＰＯなどの、市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるよう支援することである。また、石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・福祉・介護等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

２．平成 27 年度の事業の実績について：

相談先	相　談　内　容	対　応
石川県繊維協会	繊維製品の医療分野での応用に関する相談	中田　弘子准教授 ニーズ発表会での指導・助言を行った。
株式会社ＰＦＵ	ヨガ、チョイトレ教室参加者の効果測定	長谷川　昇教授 就業後に実施したヨガ、チョイトレ教室の参加者に対して、体組成測定を行った。
宝達志水町商工会	平成27年度の合併10周年桜まつり in 宝達志水	長谷川　昇教授、川村　みどり講師 健康測定、本学茶道部と県立宝達高校茶道部と協働した野点、学生によるビンゴ大会の司会などを行った。

３．今後の課題：

教員、学生が行った地域貢献活動、教員の研究活動などの連携・交流状況について、ホームページを利用して迅速に学外へ情報提供していくことにより、地域の課題解決機能を強化していく必要がある。

３　国際貢献事業

３－１　平成 27 年度 JICA 日系研修

「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」

地域ケア総合センター（国際貢献担当）　川島　和代

この研修事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、石川県立看護大学と羽咋市社会福祉協議会が実施運営する。中南米日系社会支援の一環として平成 19 年度から開始され、平成 27 年度は 9 期目の研修生を受け入れた。

１．研修目的：

高齢者の尊厳を支え、それぞれの地域で健康で自立した日常生活を支援するとともに、介護の必要な高齢者へのケアの知識と技術の実際を学び、その機能でシステム化する方法論を習得する。

２．研修実施体制：

(1) 研修期間：2015 年 7 月 14 日～8 月 7 日

(2) 研修員数：２名　パラグアイ共和国　熊野恵子氏（イグアス診療所 看護師長）、
氏家マルガリータ氏（地域福祉ボランティア（いちご会））

(3) 研修場所：石川県立看護大学、羽咋市社会福祉協議会

(4) 講師　石垣和子 川島和代　長谷川昇　彦聖美　塚田久恵　中道淳子　森田聖子　曽根志穂
金子紀子　子吉知恵美　田村幸恵　三輪早苗　井上智可（石川県立看護大学）
岩城和男　毛利浩　松浦朝子　宮下陽江　山口玉枝
柳沢昌代　高田外喜美　中元美幸　（羽咋社会福祉協議会）

３．研修内容：(別紙　スケジュール参照)

高齢者福祉制度や日本の伝統的な文化、ケアシステム、介護の知識や技術を大学にて講義・実技を学びつつ、地域の病院、施設、デイサービスなどの多様な機関における実習を行う。また、研修で得た知識等の活用方法について検討し、レポートにまとめて発表する。

４．研修目標・評価指標：

目標・評価指標・成果（行動レベルのアウトプット）を明確化し、評価をしやすくするために、報告書評価指標フォーマットに基づき評価した。目標ごとに評価指標に伴うアウトプットも具体的に記載し、アウトプットは、最終のアクションプランに繋がるように、「自国の現状把握」「自国と日本の対比」をふまえて自国と関連付けてまとめるように構成した。目標は、以下の通りである。

目標１．自国の高齢者ケアの課題を明らかにする。

目標２．地域で暮らす高齢者が生活機能を維持・向上するための支援について学ぶ。

目標３．介護が必要となった高齢者を支援するために、身体的特徴・疾患の理解と介護の知識と技術を学ぶ。

目標４．地域における介護予防と在宅ケアシステムについて学ぶ。

目標５．自国・自地域における実践可能なアクションプランの作成・発表ができる。

５．評価（総括）：

（1）プログラムの妥当性

日系社会の高齢化と介護予防、ケアサービスの確立は日本同様の課題と考えられ、本研修の実施は研修生からも妥当であるとの評価を受けた。中でも認知症高齢者の理解や対応方法に関しては、２名の研修生ともに大きな意識変容があったと述べられていた。オレンジリングの取得も学びを深めることになったと考える。認知症の予防から、当事者や家族を支えあう街づくりまで研修の学びに広がりと深まりがあったと考える。

（2）研修時期、実施体制

①日系研修を約 4 週間の短期プログラムに改変し、介護予防のみならず介護技術の習得にウエイトを移してから 4 年目である。短時間でも研修員の高い意欲と、講義・演習内容をわかりやすく伝える講師陣の工夫、実習をサポートする羽咋市社会福祉協議会の充実したプログラムが噛みあってきたと実感できる年であった。

② 研修時期は、日本のもっとも暑い時期でもあり、研修生の体力の消耗が懸念されたが、体調管理がよく無事研修日程を終えることができた。時期変更も考慮したいところであるが、担当者のスケジュールを鑑みると、この時期がベストと考える。

③プログラムを立案する中では 7 月下旬は看護大学の行事が立て込み、直前までにスケジュール変更を余儀なくされたが、羽咋市と話し合い、双方の協力で最小の変更にとどめることができた。

④大学職員のバックアップもあり、研修期間中の講義室やパソコン等の機器の確保、研修運営に大きな混乱は見られなかった。実習施設を調整している羽咋市社協から施設の研修生受け入れについても概ね前向きな反応を頂いている。

（3）研修生の準備状態

①今年度の研修生は日系 2 世・3 世で読み書きは苦手と言われていたが、高い日本語会話能力に助けられ、意思疎通が非常にスムーズであった。ほとんど研修中に難儀した印象はなかった。会話能力も重要であると考える。

②中間のまとめを設け、学びを確認して目標の遂行状況を確認することは研修生の学習ニーズの確認には有効であった。アクションプランの作成過程にもこのことは有効であった。

（4）自立発展性の観点から

①研修受け入れ９年目を迎え、パラグアイ国からの研修生が 25 名を超えたことは、一大勢力として今後の取り組みを飛躍させることが可能になるのではないかと考えられた。次の発展にどのような課題があるのか、今回の研修生とも討論を行った。

②パ国での介護専門職養成の研修コースの企画についても前向きな発言が聞かれ、フォローアップ調査の課題として視野に入れていく。

③具体的な研修内容では、帰国後、研修生が応用しやすいよう目的を絞って資料やテキストを厳選した。特に昨年度作成された高齢者介護テキスト『お世話の手引き』を活用することで過去の研修生間の齟齬をきたさないように配慮した。

④介護技術もパラグアイ国の家庭生活や医療機関等の実態に合わせて実施した。

（5）日本社会への還元について

①活動実績と同様であるが、今年度は、研修生が、羽咋地区地域福祉推進チーム研修会に参加し、「認知症キャラバンメイト」の講座を受講し、認知症サポーターの証であるオレンジリングの取得ができたことは特筆すべきことである。パラグアイの日系社会にも認知症のことが徐々に課題になってきている事を日本社会も知ることになり、視野を広げる機会をいただけたと考える。

②研修生のうちの 1 名は、パラグアイで看護職として長年勤務されている。南米パラグアイの医療提供の実際や看護職の勤務状況が今までより詳細にわかり、本学ならびに羽咋市社協においても理解の手助けとなった。

研修の光景（スナップ写真）

写真１　開講式における研修生の挨拶

写真２　羽咋市役所への表敬訪問

写真３　学生とパラグアイ料理をつくる

写真４　閉講式後、関係者と記念撮影

別紙　平成27年度　日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」日程

2015.4.7.

日付	曜日	研修目標	午前(9:00-12:00)	午後(13:00-16:10)	場所
7月5日	日		来日		
7月13日	月		移動(横浜→金沢)	宿舎入居	かほく市
7月14日	火	1. 自国の高齢者ケアの課題を明らかにする	8:30～石川県立看護大学学長表敬訪問 **1限(9:00～)　開講式** 開講式終了後、歓迎会(JICA) **2限【講義1】(石垣　)** **「日本の高齢者福祉や高齢者の生活について」**	PPの作成方法について 【討議】当該国の現状分析(カントリーレポート) カントリ-レポートの発表準備(老年看護学講座　)	看護大学 (地域ケア委員)
7月15日	水		カントリ-レポートの発表準備(老年看護学講座　)	3限:カントリーレポート発表準備(老年看護学講座　) **3限(14:40～)カントリーレポート発表** (石川県立看護大学2年次学生聴講)	看護大学 大講義室
7月16日	木		羽咋市長表敬訪問 11:00-12:00　オリエンテーション 12:00-13:00　昼食会	13:00-17:00　見学実習:　訪問介護、訪問看護、訪問入浴の実際 17:00-18:00　質疑応答	羽咋市
7月17日	金		9:00-10:00　事前学習講義:「在宅における介護者の現状と支援及び関わりについて」 10:15-12:00　在宅介護者の会「楽だの会」定例会で交流	13:30-14:30　羽咋市社会福祉協議会の概要と地域福祉について(毛利、松浦) 14:45-17:30　羽咋市の概要と市内の状況について(岩城会長、山口)	羽咋市
7月18日	土		休日		かほく市
7月19日	日		休日		かほく市
7月20日	月		休日		かほく市
7月21日	火	2.　地域で暮らす高齢者が生活機能を維持・向上するための支援について学ぶ 3.　介護が必要となった高齢者を支援するために、身体的特徴・疾患の理解と介護の知識と技術を学ぶ	【講義2】(在宅看護学:彦) 「在宅ケアと家族支援」	【学内演習】要介護者を支援するための介護技術の知識と技術(清拭・部分浴・入浴の介助、整容・爪きりの介助) (在宅看護学;子吉、井上　)	看護大学 (在宅)
7月22日	水		【学内演習】要介護者を支援するための介護技術の知識と技術(身体の不調の観察、環境の整え、体位変換、感染予防) (基礎看護学;田村、三輪　)	【講義3】(基礎看護学:川島) 「高齢者の心身機能の変化」	看護大学 (基礎)
7月23日	木		8:00-15:00　公立羽咋病院　見学実習:通所リハビリテーション	16:00-17:00 【講義4】「リハビリテーション概論」	羽咋市
7月24日	金		【講義5】(老年看護学:中道) 「高齢者に多い健康障害と治療内容」	【学内演習】「要介護者を支援するための介護技術の知識と技術(食事への援助、口腔ケア、排泄への援助、みだしなみへの援助)」(老年看護学;森田、小林　)	看護大学 (老年)

7月25日	土		休日		かほく市
7月26日	日		休日		かほく市
7月27日	月	2．地域で暮らす高齢者が生活機能を維持・向上するための支援について学ぶ 4．地域における介護予防と在宅ケアシステムについて学ぶ	まとめ1：前半の講義・実習を通して学んだことをまとめる （基礎：川島）	【講義6】（健康科学：長谷川） 「高齢者の薬と骨粗しょう症の予防・転倒予防について」	看護大学
7月28日	火		9:00−10:00　地域の高齢者の特性 10:00−11:30　高齢者筋力トレーニング体験	13:30−16:00　見学実習：運動器の機能向上通所事業「はつらつ体操教室」 16:30−17:30　まとめ：「介護予防における運動機能の向上とその評価について」	羽咋市
7月29日	水		8:30−9:00　事前学習講義：「訪問看護における看護の留意点及び心構えについて」、「訪問入浴における介護の留意点及び心構えについて」 9:00−9:30　見学実習：　訪問介護、訪問看護、訪問入浴の実際 16:30−17:00　まとめ		羽咋市
7月30日	木		9:00−15:00　脳リフレッシュ事業	15:15−16:15　ボランティアグループお達者会との交流 16:30−17:30　事前学習講義：「介護保険における通所介護（デイサービス）について」	羽咋市
7月31日	金		8:00−17:00　見学実習：羽咋市デイサービス 18:00−20:00　老人福祉センター盆踊り		羽咋市
8月1日	土		10:00−13:00　男性介護者のための料理教室	休日	羽咋市
8月2日	日		休日		かほく市
8月3日	月		8:30−9:00　事前学習講義：「小規模多機能居宅介護の機能について」 9:00−17:00　見学実習：　小規模多機能施設（わたぼうし）		羽咋市
8月4日	火		【講義7】（地域看護学：塚田　） 「地域の実情に適した介護予防活動」	まとめ2：後半の講義・演習を通して学んだことをまとめる （在宅：彦　）	看護大学 （地域）
8月5日	水	5．自国・自地域における実践可能なアクションプランの作成・発表ができる	【学内講義】アクションプランの作成方法　（地域看護学：曽根、金子）		看護大学 （地域）
8月6日	木		【学内演習】アクションプランの作成・発表準備の指導 （地域看護学：曽根、金子　）	【学内演習】アクションプランの作成・発表準備の指導 （地域看護学：曽根、金子　）	看護大学 （地域）
8月7日	金		アクションプラン発表・閉講式 送別会（大学：地域ケア総合センター国際貢献担当）	羽咋市長へ帰国挨拶 金沢へ移動	看護大学 （地域ケア委員）
8月8日	土		東京へ移動		
8月9日	日		帰国		

３－２　ＪＩＣＡ　中央アジア・コーカサス混成青年研修

「地域保健医療実施管理」コース

１. はじめに

JICA 青年研修事業は、発展途上国の人材育成を促進する目的で、将来の国づくりを担う若手人材を日本に招き専門分野の研修を提供するものである。2015 年にアゼルバイジャン 1 名、ジョージア 2 名、キルギス 7 名、トルクメニスタン 2 名の 12 名の研修員を迎え「地域保健医療実施管理」コースが本学において実施された。

実施に際しての地域保健医療に関する問題意識としては以下である。

1) キルギス、トルクメニスタン、ジョージア、アゼルバイジャンの中央アジア、コーカサス・エリアにおける循環器疾患、慢性疾患の改善に向けて努力する必要がある。
2) 衛生状態を改善する必要がある。
3) 今後、医療中心の概念から予防中心の概念に転換し、医療費の削減を目指す必要がある。
4) 出生から死亡までのライフサイクルに応じた一貫した保健医療サービスについて、考える必要がある。
5) 地域住民の潜在的な能力を引き出し、受身だけでなく、住民が積極的に保健・医療にかかわる方策について今後さらに考えていく必要がある。

２. 研修目標

母子保健指標の改善に向け、地域格差是正に向けた人材育成と保健医療従事者の質の改善を目指し当該プログラムに参加することにより、以下の項目の達成を目標とした。

(1) 予防医学、公衆衛生の概念を理解し、意識が向上する。
(2) 予防医学、公衆衛生の向上のために、リーダーとしての必要な知識と意識が身につく。
(3) 地域医療・保健のシステム、制度の重要性を理解し、自国の状況と課題に応じた予防活動を行うための基本的な考え方が身につく。

３. 研修実施体制

1) 研修期間：2015 年 11 月 23 日～2015 年 12 月 10 日
2) 研修員：12 名の地域保健医療関連の医療従事者および保健医療行政に関わる人
　　アゼルバイジャン（医師 1 名)、ジョージア（行政官 2 名)、キルギス（医師 7 名)、トルクメニスタン（医師 2 名）

研修監理員：2 名　濱田 真理・大橋千加子

3) 企画・実施担当(講師含む)

本学教員 8 名：長谷川昇、川島和代、塚田久恵、金子紀子、石垣和子、大木秀一、織田初江

視察施設担当者 22 名：菊地修一・手井博史（石川県庁健康福祉部)、長基健人、山下千佳子（高尾コメヤ薬局)、亀井淳平、小林淳二、奈良崎友子、スタニスラフソロギン、北方秀一、川嶋政広（金沢医科大学病院)、卜部　健（公立松任石川中央病院)、橋本宏樹（公立つるぎ病院吉野谷診療所)、沼田直子、織田修吾（石川県南加賀保健福祉センター)、茗

荷谷弘子、喜多たか子（小松市市民福祉部いきいき健康課すこやかセンター）、田畑正司、中西博子（石川県予防医学協会）、東　和美（白山松任訪問看護ステーション）、柿本　均、北川恵美子（石川県保健環境センター）

事務局（地域ケア総合センター）１名：塚本晃弘

４．研修内容

研修の全体概念図は図１、研修日程は表1に示すとおりである。

図1　2015年JICA中央アジア・コーカサス混成青年研修　全体概念図

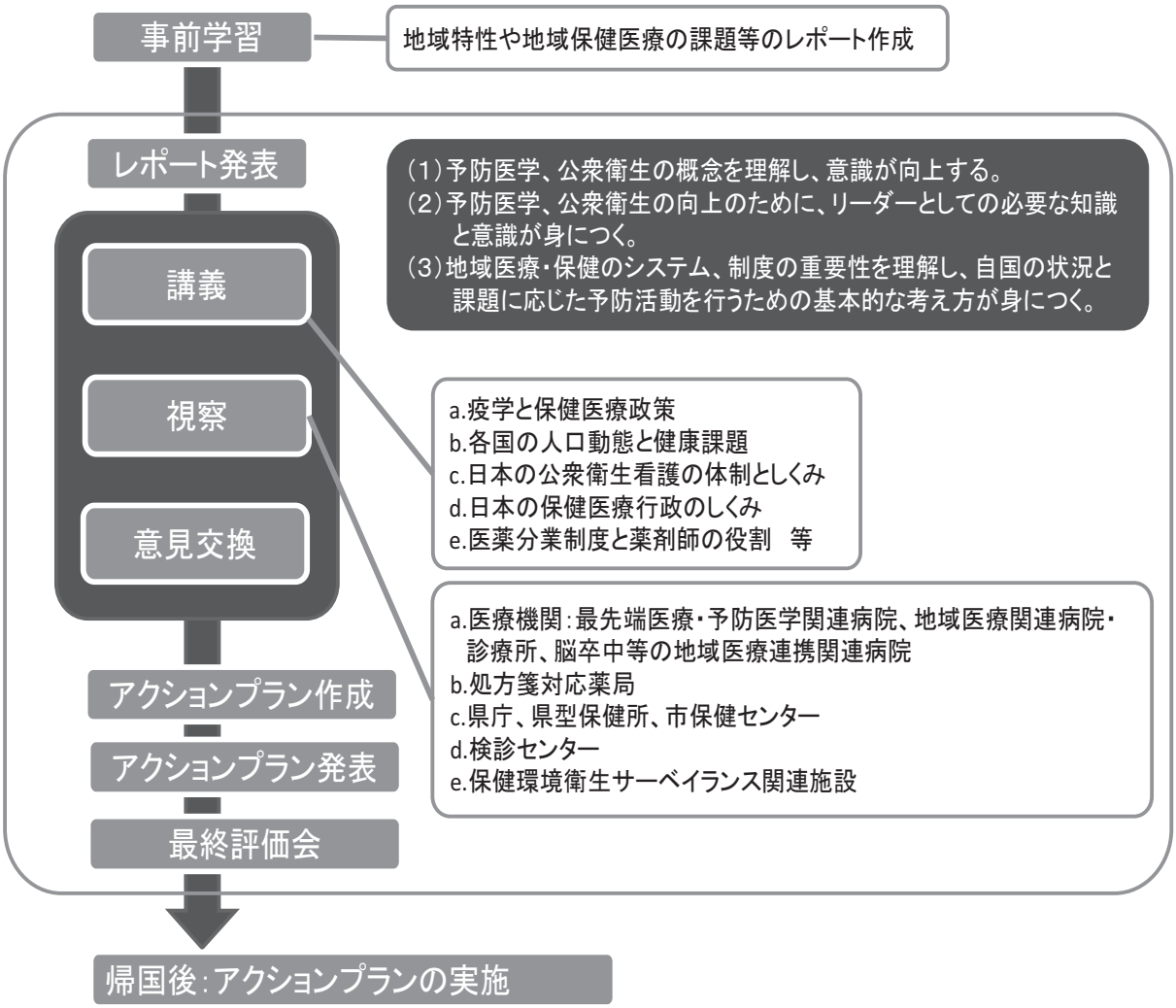


表1　2015年JICA中央アジア・コーカサス混成青年研修「地域保健医療実施管理」日程表

月	日	曜日	午前		午後	
11	25	水	10:45～11:15 開講式	11:30～12:45 歓迎会(昼食兼)	13:00～16:00カントリーレポート発表	
	26	木	9:00～12:00 【講義】(石垣・織田) 人口動態に見る国の健康課題		13:00-14:30 【講義】(塚田・金子) 日本の公衆衛生看護の体制としくみ	14:40-16:10 【講義】(長谷川) 医薬分業制度と薬剤師の役割
	27	金	9:00-12:00【講義】(大木) 疫学と保健医療政策		14:00-16:00 【講義・見学】(高尾コメヤ薬局) 医薬分業の実際	
	28	土	自主研修			
	29	日	自主研修			
	30	月	10:00-12:00 【講義】(石川県健康福祉部) 日本の医療行政の仕組み及び保険制度について		14:00-16:00 【見学】(金沢医科大学病院) 最先端医療と予防医学(三次医療)の実際	
	1	火	9:00-12:00 【見学】(公立松任石川中央病院) 地域医療(二次医療) 及び地域医療連携(循環器・脳卒中等)の実際		14:00-16:00 【見学】(公立つるぎ病院吉野谷診療所) 地域医療(一次医療)の実際	
	2	水	9:00-11:30 【見学】(石川県南加賀保健福祉センター) 公衆衛生の実際①保健所の役割と業務		13:00-16:00 【見学】(小松市市民福祉部いきいき健康課すこやかセンター) 公衆衛生活動の実際②市町保健センターの役割と業務	
	3	木	9:00～11:30 【講義・演習】(塚田) 振り返りとまとめ　＊石川県立大学		14:00-16:00 【見学】(石川県予防医学協会) 検診センターの役割と業務	
	4	金	9:30-11:30 【見学】(白山松任訪問看護ステーション) 地域医療と訪問看護の役割		14:00-16:00 【見学】(石川県保健環境センター) 保健環境サーベイランスの実際	
12	5	土	自主研修			
	6	日	自主研修			
	7	月	9:00～16:00【講義・演習】(塚田)　全体振り返り、レポート作成			
	8	火	9:15～10:15JICA評価会	10:30-12:30 成果発表	12:30～13:00 閉講式、 13:00～14:00 送別会	

５．研修評価

今回の研修の企画は、将来のリーダーとしての予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う青年層の知識と意識の向上を目指したものであり、対象を医師、看護職、行政官とした。旧ソビエト社会主義共和国（ＳＳＲ）であったキルギス、トルクメニスタン、ジョージア（旧グルジア）、アゼルバイジャンの４カ国から研修員 12 人が最終的に決定された。医師（精神科、外科、産婦人科、救急救命、小児科、放射線科）が 10 人、行政官が 2 人であり、職種が医師に偏在していた。本研修は、短期間の研修であることから、予防医学的な専門技術研修ではなく、予防、公衆衛生、地域医療、地域医療連携をキイワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムとした。また、企画段階では、研修員の職種が不明であったため、プログラム内容を医師、看護職及び薬剤師等の職種に対応できるよう配慮した。また、公衆衛生領域だけではなく、医療連携と予防医学を中心に病院の機能を視察に取り入れ、最先端医療についても多少触れた。しかし、今回予防を中心に学びに来て、

また、その目的を理解はしていたが日本の最先端医療や治療をもっと見たいという要望は強いものがあった。また、研修員の中に精神科医が１人おり、プログラムになかった精神科医療の視察を強く要望されたため、病院の許可を得て、時間の許す範囲で視察の機会をつくった。このことは、研修員の視察目的の１つとして叶い、大変喜ばれた。

全体的に短期間の割には、タイトなプログラムになり、ディスカッションの時間を多く取れなかったことが反省である。今後、対象者の職種を絞り込むことで、視察先も限定すれば、もっと充実したプログラムになると考えるが、青年研修の目的から考えると広く浅く学び、刺激を得、今後さらに深く学ぶ機会となったのではないだろうか。

アクションプランにおいては、複数国の混成ということで発表時間が限られた。発表内容は、帰国後に自分たちが実施可能なものであり、かつ具体的なものとしたが、発表すべて今回の学びをうまく取り入れ、自国で可能な無理のない計画となっていた。今回の研修員は高いポジションにいる人が多く、予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う地域や国のリーダー的存在として、活動を行うことが期待される。また、それが今回の研修を実施する日本の目的にかなうものであることを研修を通じて強調した。

JICA が実施した研修員からの評価の中から、本学の研修に関する項目については以下のとおりである。

1. あなたもしくは所属組織が案件目標を達成する上で、プログラムのデザインは適切と思います。

←適切である				適切ではない→
点数	4	3	2	1
人数	6	6	0	0

2. 研修期間は適切でしたか。

点数	長い	適切	短い
人数	1	9	2

3. 本研修の参加人数は適切だと思いますか。

点数	多い	適切	少ない
人数	0	12	0

4. 本研修において研修参加者の経験から学ぶことができましたか。

←できた				できなかった→
点数	4	3	2	1
人数	4	6	2	0

5. 視察や実習など直接的な経験を得る機会が十分ありましたか。

←十分あった				なかった→
点数	4	3	2	1
人数	3	8	0	1

6. 討議やワークショップなど、主体的に参加する機会が十分ありましたか。

←十分あった				なかった→
点数	4	3	2	1
人数	4	4	2	1

7. 講義の質は高く、理解しやすかったですか。

←良かった				不十分だった→
点数	4	3	2	1
人数	5	5	2	0

8. テキストや研修教材は満足するものでしたか。

←満足した				満足していない→
点数	4	3	2	1
人数	7	4	1	0

9. 本研修で得た日本の知識・経験は役立つと思いますか。

A	はい、業務に直接的に活用することができる。
B	直接的に活用することはできないが、業務に応用できる。
C	直接的に活用、応用することはできないが、自分自身の参考になる。
D	全く役立たない。

点数	A	B	C	D
人数	5	6	1	0

４　そ　　の　　他

４－１　平成27年度かほく市との包括的連携協定にかかわる本学の取り組みについて

地域ケア総合センター　センター長　長谷川　昇

１．平成27年度の取り組みについて：

平成22年10月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して5年目を迎えた。

本年度はかほく市が幹事となり、2回の協議会が開催された。

6月3日（水）第1回協議会：昨年度の事業実績報告と本年度の事業案について

11月12日（木）第2回協議会：本年度事業の進捗状況報告と、来年度事業の計画立案について

（第2回協議会は、来年度事業をスムーズに遂行するため、来年度事業計画に伴う予算計上時期に合わせて開催した。）

連携した提案事業は少しずつ整理・再編され、今年度はかほく市から継続7事業、新規1事業、石川県立看護大学より継続3事業が実施された。

	かほく市主催事業	看護大担当	看護大主催事業
1	ケーブルテレビ事業（企画情報課）	垣花准教授	
2	担当（健康福祉課・長寿介護課・生涯学習課）	垣花准教授	＃50代をターゲットにした健康教育の効果に関する研究―インセンティブの付与に着目して
3	認知症にやさしいまちづくりシンポジウム（介護予防課）	川島教授	
4	＃介護サポーター養成講座（長寿介護課）	塚田准教授	
5	介護予防講座の効果的な展開（介護予防課）	塚田准教授 彦准教授	
6	かほく市民体力テスト（生涯学習課）	垣花准教授	
7	問題を抱える子供等の自立支援事業（学校教育課）	武山教授 西村教授	
8	教育相談事業（学校教育課）	武山教授	
9	＃地域少子化対策強化交付金事業（子育て支援課）	西村教授	
10	担当（子育て支援課）	武山教授	＃「子育てしやすい街づくりフォーラム」開催
11	道の駅活性化（産業振興課）	垣花准教授	

12	＃市民の体力測定結果の集積事業（健康福祉課・保健医療課・生涯学習課・長寿介護課）	長谷川教授 垣花准教授	
13		地域看護学講座	高齢者と看護学生との交流事業（地域看護方法論Ⅰ・Ⅱ）
14		老年看護学講座	高齢者と看護学生との交流事業（老年看護学概論）
15		老年看護学講座	看護学生によるフィジカルアセスメント（老年看護方法論Ⅱ）

＃は新規事業

ケーブルテレビ事業では、垣花ゼミが実施した「わくわくサークル」について密着取材を受け、9 月 4 日から 11 日に放送された。「健康弁当」について、特集番組が放送された。

50 代の市民をターゲットにした、市民の体力測定結果の集積事業では、第 1 期から 3 期までの合計 60 名が、歩数・体重測定を記録し、健康づくり事業に参加し、この内、健康応援倶楽部・健康増進モデル事業に参加した 31 名の市民対象に歩数管理を行った。

認知症にやさしいまちづくりシンポジウム事業では、川島教授がコーディネータとして参加した。

介護予防サポーター養成講座では、3 回のコースのうち、第一回目（7 月 22 日）に塚田教授が「介護予防と地域づくり」のテーマで講演した（参加者 61 名）。

介護予防講座の効果的な展開事業では、男性介護者の集い（11 月 18 日「きーなが」）で彦准教授が講師を勤め、塚田准教授が「地域包括支援センター運営協議会（10 月 23 日）」で、助言を行った。高齢者と看護大の交流事業では、本学学生と高齢者の交流事業を実施した。

かほく市民体力テスト事業では、長谷川教授、本学学生計 7 名が企画・運営に協力し、参加者 160 名の測定を行った。

問題を抱える子供等の自立支援事業では、不登校問題対応運営協議会、問題を抱える子供の事例研究会開催に際し、武山教授が助言および指導を行った。相談室登校の生徒や教育支援センターでの不登校児童・生徒の学級復帰支援として、本学学生が市内各中学校およびスマイル教室に学習支援ボランティアとして関わった（5 名、140 回）。

教育相談事業では、いじめや不登校など学校での問題行動や家庭で悩みを持つ子供、保護者、教職員に対して、武山教授が教育相談を実施した（5 件）。

地域少子化対策強化交付金事業では、西村教授が、妊娠期や出産後間もない母親を対象にペアレンティングプログラムの開催及び事業計画に向けたシステム構築に関する助言を行った。

「子育てしやすい街づくり」フォーラムでは、地域貢献部会とかほく市子育て支援課との共催による子育て支援フォーラムとワークショップを行った（参加者 52 名、5 名のファシリテーター）。

道の駅活性化事業では、垣花准教授が親子を含む 20 名の公募者を対象にパステル画教室に協力した。

その他、かほく市内への学生居住促進のための「かほく市学生居住助成金制度」がある。かほく市に住民登録している学生 1 人あたり、年額 60,000 円の助成を頂いている。

以上の事業の他に、かほく市民大学校（平成 26 年 5 月 15 日（金）19：30-21：00)、『脳と心臓と腎蔵』への講師派遣（多久和教授）を行った。

２．平成 28 年度に向けて新規事業の実施についての検討：

平成 27 年度新規事業として、かほく市より「市民体力測定結果の集積事業（健康福祉課・保険医療課・生涯学習課・介護予防課）－長谷川教授、垣花准教授」、看護大学から「子育てしやすいまちづくり」と「50 代をターゲットにした健康教育の効果に関する研究―インセンティブの付与に着目して（健康福祉課）－垣花教授」が提案された。今後も継続して、市民の健康増進に寄与していきたい。

さらに、「子育てしやすい街づくり」については、ファーラム開催に留まらず大学からかほく市に積極的に働きかけ、協働で課題解決を目指すようなプログラムも考えていきたい。

４－２　石川県委託事業・協力事業

「介護職員による喀痰吸引等の研修事業の実施協力」

基礎看護学講座　川島　和代

１．石川県における介護職員等への喀痰吸引等の研修事業の内容と研修修了者数

平成 23 年６月『社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部改正』の施行ならびに種々の通達により、現場の介護職員等が喀痰吸引・経管栄養の医療的ケアを安全に実施できるようになった。本県においても　　「喀痰吸引等」の研修事業を企画する必要性が生じて石川県が企画したものである。

本研修事業は石川県社会福祉協議会福祉総合研修センターが研修委託を受けた。石川県健康福祉部長寿社会課から本学に実施協力要請があり、技術支援ならびに運営協力を行うことになった。そこで、平成 23 年度より、厚生労働省の教育プログラムを参考に研修企画を立案し、県内の看護職 10 名（介護老人福祉施設、介護老人保健施設、医療機関等で勤務する看護職員で構成）を講師として組織し、研修事業に着手した。本事業には不特定の対象に喀痰吸引等を実施できる「第 1 号研修・2 号研修」と、特定の対象にしか実施できない「第 3 号研修」がある。

本学では平成 25 年度には「医療的ケア」の手順解説を中心にテキスト・DVD の作成に取り組んだ。喀痰吸引や経管栄養を実施する上で必要な人体の構造や機能、安全対策、感染防御、基本的なケア等に関して、可視化できる教材を準備し、看護職員と介護職員の連携を重視した教育内容を試行してきている。基本研修等の内容は図１の通りである。

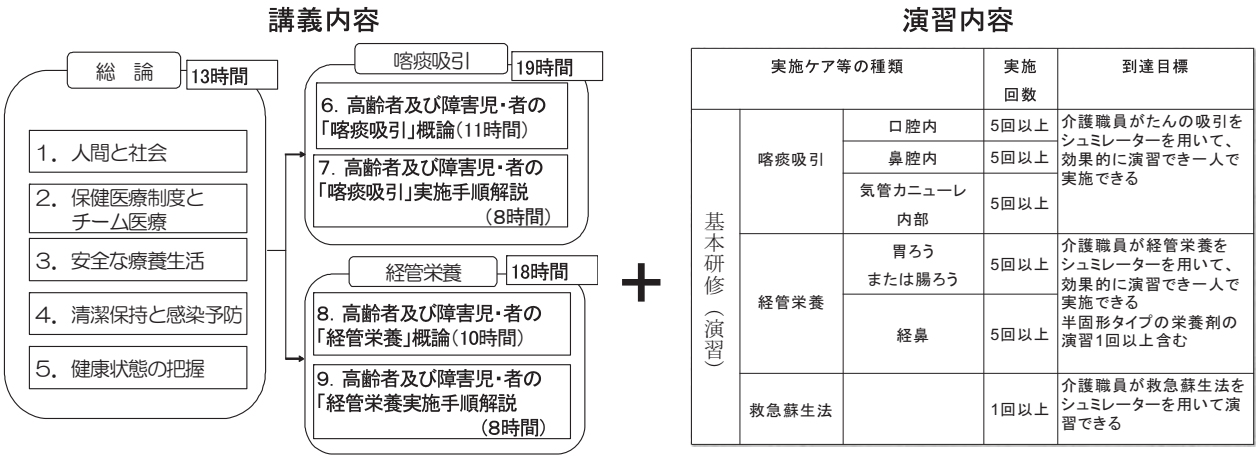


図１．基本研修の講義と演習の内容

石川県立看護大学において開催した「介護職員等による喀痰吸引等の研修事業」は定員 150 名（平成 23 年度除く）、前期・後期の年 2 回、研修会を開催している。具体的な講義・演習は３～4 名のグループ学習を基本とし、受講生同士が互いに刺激し、それぞれが教えあうことを意図している。

「指導者養成講習会」（ほとんどが看護職員）は定員 100 名（平成 23 年度除く）とし、同様に前期・後期の年 2 回開講している。指導者は講習会修了後、引き続き介護職員の研修事業に参加することを条件とし、実地研修までに自己の指導力を高めるようプログラムしている。

本研修では、介護職員・看護職員ともに根拠を理解してもらうことを重視し、知識・技術の根拠となる文献等は教育機関に所属する講師が適宜準備している。また、感染管理認定看護師や救急蘇生の資格を持つ看護職、人工呼吸器のメンテナンスを行っている業者、栄養剤を製造しているメーカーにも講義を依頼し最新の知識・技術を学ぶよう組み立てた。

平成 23 年度から平成 27 年度までの 5 年間に研修を受講した介護職員と指導者養成講習会の参加者（主に看護師）の推移は図２、図３に示すとおりである。

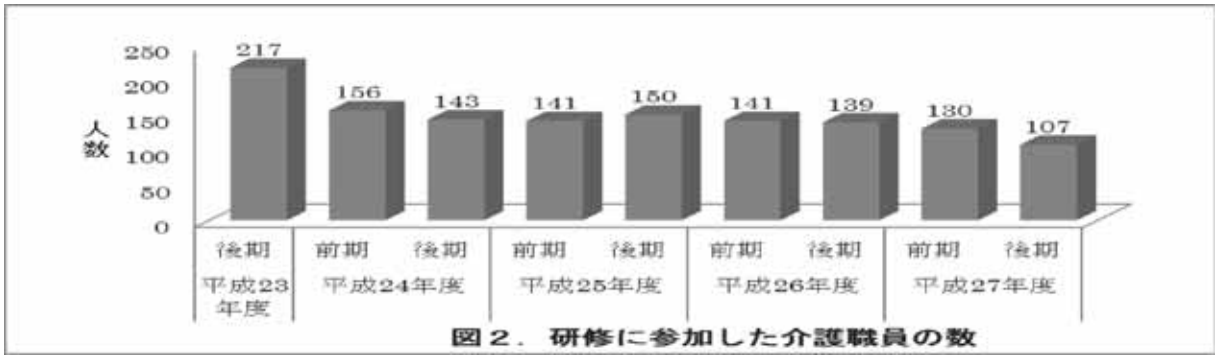


図２．研修に参加した介護職員の数

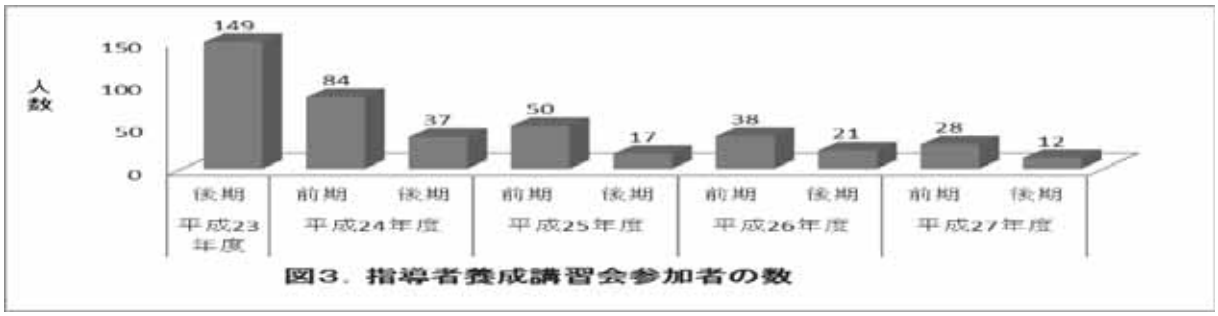


図３．指導者養成講習会参加者の数

平成 25 年度からは特定の者を対象とした「第 3 号研修」の中に訪問介護だけではなく、特別支援学校の教員等が加わってきた。高齢者のみならず児童においても喀痰吸引等が必要な県内の障害者にとって有用な取り組みであると考えられる。

基本研修終了後は、アンケート調査を継続的に実施し、学習環境や学習内容・勧め方、指導者の対応等について意見を集約した。石川県立看護大学を活用した学習環境に関しては 90%以上の満足度が得られているものの、能登北部地域や南加賀地域からの受講生には遠距離であるとの意見が見られた。

平成 27 年度より第 1 号・2 号研修の講義科目だけ２会場化（金沢地区、能登地区）をすすめ実施となったところである。また、平成 26 年 3 月には神奈川県と熊本県における喀痰吸引等の研修事業取り組みを参考に喀痰吸引や経管栄養の演習実施の進め方について修正を図っている。平成 27 年度に取り入れたこれらの修正は、研修時間の短縮や効率化に寄与した。

２．本研修事業の今後の課題

１）指導者（医師・看護職員等）の確保

本研修事業を継続するためには、講義担当できる講師、演習・実地研修において指導できる指導者の確保が鍵である。指導者確保は、現場における「実地研修」の実施、ひいては介護職員が「認定特定行為従事者」として登録できるか否かを大きく左右する。しかしながら図３に示したように指導者の養成数は年々減少しており、今後、本研修が維持できるか危惧されるところである。医師・看護職等に本研修事業を周知する啓発活動が必要であると考える。一方で、本事業の関係者からは、新たな指導者を増やすばかりではなく、過去の 400 名近くの講習会受講者の指導力を維持・担保できるようフォローアップ研修の必要性も提案されている。介護保健施設等の看護職員へのフォローアップ研修等が本学の地域ケア総合センターの事業に位置づけられるよう、今後の検討が必要と考える。

２）介護職員の認定の遅れ

喀痰吸引等の研修受講修了者（介護職員）が現場で実地研修を修了できず最終的な「認定特定行為従事者」に至っていない者が今期も４割近くにのぼることが明らかとなった。学んだ知識・技術を生かして登録に至らない介護職員の存在が今後の課題と考える。現場の実態について調査等が必要ではないかと考える。

４－３　被災地ボランティア活動（宮城県）

実施目的：

東日本大震災で被災された多くの住民が仮設住宅から災害公営住宅へとその生活基盤を変えようとしているのが現状である。しかしその地での新しい絆づくりという新たな課題が今まさに生じている。被災地の社会福祉協議会と連携して、その絆づくりに学生によるボランティア活動を役立てようというのが目的である。

実施状況：

日時：平成 28 年 3 月 3 日（木）～3 月 5 日（土）

場所：宮城県亘理郡亘理町

内容：3 月 4 日（金）10～12 時　浜吉田北地区集会所　　ひな人形折り紙細工手伝い
個別訪問

3 月 4 日（金）14～16 時　西木倉災害公営住宅集会所　ポケットティッシュ袋飾りつけ
イキイキ百歳体操　個別訪問

参加人数：学生 27 名、教員 3 名

実施成果：

亘理町の浜吉田北地区集会所では約 30 名の住民の参加があった。以前のボランティア活動の際にも参加された方の顔を見られ、和やかな雰囲気の中、笑顔をこぼれる楽しい時間となった。

午後からは西木倉災害公営住宅集会所で約 25 名の住民の参加があった。午前からの引き続きの住民もあり盛況であった。

また個別訪問を生活支援相談員の方と一緒に行った学生も一部あり、災害公営住宅のお部屋にあたたかく迎え入れてもらった。

初めて参加した学生にとっては、「実際に被災地に行ってみないと分からないこと」を多く感じる貴重な機会になった。また「震災はとても辛かったけど、人の優しさや温かさに触れていいこともあった」という参加してくださった方の言葉を印象深く振り返る学生もあった。そして「また来たい」「活動を継続してほしい」という学生の声が多くあった。

今後の取組予定：

被災地の災害公営住宅に転入した方の孤立化防止を目的とした今回の被災地ボランティア活動は、被災地の社会福祉協議会担当者や民生委員の方々のご協力もあり大変盛況であった。被災地に新たな絆づくりが根づいていくまで継続していくことの重要性を改めて感じる機会となった。「被災地で現在生じている問題は、日本全国の高齢化が進む地域で起こっていることがより顕在化しているのでは」という学生の振り返りにもあるように、被災地で学んだことを地元に還元していくことが可能であり、その方向性を模索していきたい。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事 業 報 告 書（第１３巻）

平成28年12月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
〒929-1210
石川県かほく市学園台１丁目１番地
Tel.076-281-8308　　Fax.076-281-8309

Ⓒ 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

版権は石川県公立大学法人に帰属する。

印刷用の紙にリサイクルできます。